無限の魂を持つ転生者

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限の魂を持つ転生者

【Ｎコード】
Ｎ０７８０Ｗ

【作者名】
まりも

【あらすじ】
なんかもうお約束通りに死んだ主人公。
神様にもらった能力は魂の塗り替え。
送られる幾多の世界で主人公はどのように生きるのか？
無限の魂を持つ転生者。始まります。

プロローグ（前書き）

こんにちは。まりもです。
至らぬ点ばかりですが、ご容赦を。

プロローグ

死んだ・・・ｏｒｚ
そう思ったのは、ついさっき。
複数の男に囲まれていた女性を北斗神拳もどき（爆発しない）で倒したとき、
後ろで銃声が聞こえ、左胸に熱い痛みが走ったときだった。
心臓の最後の鼓動によって血液が俺の脳を通り過ぎるまでの間、
俺が唯一脳裏に映せたのは、死んだ・・・ｏｒｚだった。

あ、俺死んだんだ・・・ｏｒｚ
そう確信したのは三秒ほど前。
目が覚めたと思ったら目の前に長いひげのじーさんが居たときだ。
よく二次小説を読んでいた俺は、瞬時に予測することが出来た。
・・・テンプレ？・・・と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はい！やっぱりテンプレでした！
なるほど。あの弾は横の女性を狙ったものだったらしい。
しかもあの女性は、実はヤクザのボスって・・・。助けなきゃよかった。

「で、爺さん。どうするんだ？これから。」

「ふむ。お主にはアニメやマンガ・・・・つまり二次元の世界に行ってもらう。
残念じゃがどの世界かは選択できん。すまんの。わしも、全知全能ではないのじゃ。」

へー。神様って言ってもいろいろあるんだな。

「力とかってもらえるのか？」

「うむ、一つだけじゃが、何でもいいぞ。」

「ふむ。・・・・じゃあ。」

俺が生前考えた奴を言ってみる。

「じゃあ、魂の塗りかえで。」

「ふむ、どういう能力じゃ？」

「俺という魂を塗り替える能力。対象は俺が知っているアニメ、漫画、小説の全キャラクター。
俺という魂の上にキャラの魂をかぶせる。たとえばのび〇を選択した場合、俺の魂をの〇太の魂で覆う。
すると外見は俺でも、中身。つまり、思考も性格も動きも〇び太って分け。」

「なるほどな。」

「それと、そのキャラは俺の多重人格ってかんじにしてくれ。
あと、塗り替え中はそのキャラの能力、武器も使用可能に。
記憶は完全に共有。これで塗り替えていても俺の目的などがキャラに伝わる。」

「わかった。あと、わしからの好意で、魔力は多めにしておいてや

ろう。」

「ああ、ありがとう。魔力がなかったら何にも出来ないからな。」

「じゃあ能力をつけるぞ・・・。えいやっ！・・・これでいいはずじゃ。」

早ッ！？めっちゃ簡単そうにやったよ。この人。いや、神様。

「じゃあ早速・・・。だれにしようか・・・？じゃあセイバーで。」

イメージイメージっと。あ、体の感覚が・・・。

「神様。お腹がすきました。・・む。・・・・なるほどね。」

「どうじゃ？」

「塗り替え中も意識はあるんだな。ちゃんと記憶も共有されてるみたいだし。」

神様って言ったしね。

「でもさ、何でこんなに親切なわけ？」

「・・・・じつは、お前はある実験のために転生させられる。」

「ゑ？」

「アニメの世界に、転生者を送るとどうなるか・・・という実験じゃ。

お主には好きに生活してもらってかまわんのじゃが、永遠にアニメの世界をまわることになる。
つまり、お主には無数のアニメの世界すべてに行ってもらわねばならんのじゃ。永遠に。」

なるほど。そういうことか。

「別にいいさ。俺は全部楽しんで生きていくから。」

「・・・ありがとうの。じゃあ、世界に送るぞ。最初の世界だけなら、選択できるぞ。」

「まじ？じゃあ・・・・ネギまで。」

「ホントにいいんじゃな？」

「いいよ。出来れば時代は赤き翼が大暴れする少し前ぐらいで頼む。」

「わかった。本当にすまんの。この通りじゃ。」

そういって爺さんは頭を下げる。

「ちょっと！？頭を上げてくれよ。別にいいからさ。」

「・・・わかった。では、永遠の人生を楽しんでこい。」

爺さんの言葉と共に扉が現れる。

眩い光を放つその扉に、俺、斉藤霧弥（サイトウキリヤ）は足を踏み入れた。

プロローグ（後書き）

さて、頑張らないと。
あ、使うキャラなどのアイデアをくれると嬉しいです。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。（前書き）

書いた後思った。
一人一人の視点が短い・・・。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。

視点　霧弥

お、おおおおお！？

扉に入ったと思えば・・・。

何で俺は落ちてんのおおぉ！？

やばい、速度がやばい。落ちたら死ぬ。絶対死ぬ。

な、何とかしなければ！

えっと、えっと、・・・「あ、相川歩！」ドグチャ！「グハッ！？」

「な、何だよいった・・・・・あ、危なかった。ゾンビパワーすげえ。」

すまない歩よ。グチョッとさせた上にセリフを切っちまった。

あ、何だよいった、までが歩でそこから先は俺だよ。

あのまま落ちたら絶対死んでた。俺はただの人間。

能力を使わなければただの人間。大事なことなので二回言いました。

ピラッ

ん？何だこれは？

えっと何々？手紙？神様から？

〜お主のネギまの世界の原作知識はこちらの都合で消しておいたから。ガンバ☆〜

なんだってー！・・・・ちょっと待てよ・・・・。

うん、やっぱり無理。ネギまって言う世界だってことと、アラルブラって奴のことしか思い出せない。

グウ〜〜。

やばい、腹減った。

視点　アルビレオ

ふふふふふ。こんにちは。アルビレオ・イマです。

今日の私たちの昼食は旧世界の日本の料理だそうです。

鍋料理・・・と言いましたか。

「じゃ、早速肉を・・・」

ナギは気が早いですね。

「あっナギおまっ・・何肉を先に入れてるんだよ！？」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ。」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

ゼクト、それは・・・。

「バッバカ！火のとおる時間差というものがあってだな・・・。」

「あーうっせ、うっせーぞ。えーしゅん。」

ひょいひょいっ

ナギは次々と肉を入れていきます。

それを止める詠春。たしか・・・。

「ふふ・・詠春、知ってますよ。日本では貴方のような者を・・・鍋将軍と呼び習わすようですね。」

「ナベショーグン！？」

「つ・・強そうじゃな。」

ナギとゼクトが驚愕に目を見開いています。
その時でした。空から少年が降ってきたのは。

視点　霧弥

俺があのあとどうなったか簡単に説明しよう。
いいか？かんたんにだぞ？
よし・・・・実は俺・・・・拾われた。
「うぐっ！？」
「霧弥！大丈夫か！？」
詠春が背中をバシバシとたたいてくる。
「んぐぐ・・・ぷはあっ！はあっはあっ・・・死ぬかと思った。」
シイタケがつるんって・・・。

「霧弥、なにやってんだよ。」

「大丈夫でしたか？」

「大丈夫だよ。」

・・・とまあこんな風にアラルブラに拾われて、鍋を頂いてます。

出合ったときに誰なのかがわかったから、アラルブラだって分かった。

ちなみに若返ってた。１４歳くらいに。

「それにしてもなぜ空から？」

「いや、俺もあんまり意味が分からないん｛ゴシャッ｝・・・だ？」

いきなり空から剣が・・・。あつい。鍋の中身が掛かった。飯食いそびれた。

・・・詠春なんて鍋かぶってる。ひどいなあ。・・・ふざけんなゴラ！

「お食事中失礼！・・・（霧弥はここまでしか聞いてません。）」

お食事中失礼だと！？失礼だと思うなら待ってろよ！

「ハハハハ（フフフフ）俺の食事を邪魔する奴は（食べ物を粗末にするものは）・・・」

「「斬る」」

まずは詠春が飛んだ。俺は飛べないから準備しとく。

あの筋肉ダルマをぶっ飛ばすため。

俺って筋力も一般人並だから。塗り替えしたらどうか分からないけど。

「お、詠瞬の攻撃凌いでるぜ。」

「あの大男、やりますよ。見た事があります。ちょっと前南で話題になった剣闘士ですよ。」

へー。そろそろ塗り替えするかね。

やっぱりご飯の恨みと言えばセイバーでしょ。

「塗り替え、セイバー。・・・・食事の邪魔をする輩は許しません。」

こうして、俺の魂は塗り替えられた。

視点　詠春。

ガキキンッ

これで何度目かの打ち合い。

なるほど、この男、かなりやる。

「ちょっ！タンマタンマ。あんたマジでつえぇな。ちょいまたね？」

この男、何を・・・。

「ふざけるなっ。やる気なら本気をだせ貴様っ！」

「へっそースか！けど四対一だし本気出す訳にはいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜ！」チャッ

なんだ？カプセル？何が入っているんだ。

ポイッポイ。

何が出てきても大丈夫なように構える。

ポポンッ

「ブッ！？」

ななななな、なぜ全裸の女性が四人も・・・。

「情報その一。生真面目剣士はお色気に弱い。」

ぽにょぽにょ。

「ぐっ・・卑劣な。いや、何のこれしき、心頭滅却すれば火もまた

――「ゴンッ」ブバッ！？」

「ホイ一丁上がり。」

視点　セイバー

あの剣士、なかなかやりますね。

しかし、狸の置物で殴られて負けると言うのはどうでしょうか？

いま、〔保険〕と言う札をつけた少女に殴られ、剣士が負けました。

情けないですね。私は女なので大丈夫です。・・・体は男ですが。

とにかく、いまはあの男です。あの男に制裁を加えねばならない。

私は男のいる高台まで飛びます。

「おっ？」

「我が名はアルトリア。食物を粗末にする愚か者に制裁を加えに参

上した。・・参る。」

「あれ？こんな奴データになかったぞ？新参か？」

「余所見をしている暇が・・・あるのですか！」

エクスカリバーで横薙ぎに一閃。

ガンッ

「おっと、あぶねえなあ。」

折れた剣で止められました。やりますね。

「ハアァッ！」

エクスカリバーで切りかかる。

「やべっ、ぬふん！」

「なっ！？」

地面を抉り取って石つぶてに！？

「はっ！」

横に飛び、かわす。まずい、距離が開いた。

「いくぜっ！ラカン・・・インッ・・パクトォ！」

ものすごい量の気の奔流。これはさすがにまずい。ですが、私には防ぐ手段がある。

「全て遠き理想郷（アヴァロン）！」

これが、私の最強宝具。聖剣エクスカリバーの鞘。アヴァロン。

この宝具はすさまじい治癒能力を持ち主に与えると共に、老化も停止させ、外部からの攻撃を完全に遮断する。

つまり、最強の防御です。

「なにぃ！？無傷だと！」

「それだけですか。ならば、次はこちらがいきます。」

私はエクスカリバーを構える。

「エクス――――――」

「大呪文か！？気合防御！」

「カリバーーーーーー！」

「へ？ちょっま、やばいって。」

男を襲う光の奔流。その本流は容赦なく男を包み込む。

「ぐ・・がああああ！」

・・・光が収まる。少し先には、男が立っていた。随分と傷を負っていますが。

「まだ立つ事が出来るとは、賞賛に値します。」

「へっ、強いながきんちょ。もっとやらね？」

「いえ、遠慮します。大分怒りも収まってきたので。あとは、ナギとでもやってください。」

「じゃ、そいつを倒して、もういっかいだ！」

「分かりました。約束します。では。・・・・・ふう。なあ、ちょっと頼みが。」

「へ？なんかいきなり雰囲気が変わったな。まあいいや。何だ？」

「あのさ・・・・下まで、運んでってくれ「ガラッ」・・・へ？」

あああああ～。おちる～。

視点　アル（アルビレオ）

私たちは、詠春を介抱しながら霧弥の戦いを見ていました。

ここまで声は届きませんが、霧弥が剣で戦っています。

正直、霧弥があそこまで戦えるとは思いませんでしたが。

あ、男が距離をとりましたね。大きいのを放つ気でしょうか？

霧弥は大丈夫ですかね？

「あれはまずいのう。」

「おや、ゼクトもそう思いますか。」

「あれだけの気が集まっていったら誰でも気づくと思うがのう。」

「それもそうでしたね。しかし、霧弥は大丈夫でしょうか？」

「まあ、霧弥はまだ子供だし、相手も手加減するじゃろう。」

その瞬間、相手の攻撃が放たれました。

「・・・・・あれは手加減しているのでしょうか？」

「・・・・・手加減なしじゃな。」

攻撃は霧弥に近づいて行きます。

そして、攻撃が霧弥に当たった！・・・と思った瞬間、攻撃は誰もいない方向へと飛んでいきました。

「いまのはなんじゃ？」

「反射・・いえ、攻撃を霧弥に干渉させなかった感じですかね？魔法具でしょうか？」

「じゃが、それほどの魔法具ならもはや封印級じゃ。それほどの魔法具ならアルも分かるじゃろ。」

「そうですね、しかし、あれが何かは分かりませんね。」

「つまり、何らかの魔法か、いまだ発見されていない魔法具と考えたほうがいいのではないか？」

「そうですね、あ、霧弥も攻勢に出るようですよ。」

霧弥も、自身の剣を掲げ、振り下ろしました。

「エクス――――――」

霧弥の魔力が剣に集中していきます。あの剣も魔法具でしょうか？

「カリバーーーー！」

霧弥の剣から、極大の光の奔流が放たれます。

「なんじゃあれは！？」

「霧弥もバグでしたか・・・・。それに、エクスカリバー。たしか旧世界の・・・。」

調べてみましょうかね。

む、あれは・・霧弥が落ちてきました。

上を見ると足元であっただろう場所が崩壊してます。

あ、地面に・・・。生きてますね。

さて、いろいろ聞き出しましょうか。

視点　霧弥

落ちていってしまったけど、無事生還を果たした。

スマナイ、歩・・・。

そして早々にあるとゼクトに聞かれたんです。

「「あれはなんだったのですか（のじゃ）！？」」

えっと、あれって？エクスカリバーとか？

「えっと、俺の魔法だよ。」

「魔法だったんですか？あれ。」

ええっと、もう能力の説明したほうが早くね？

「えっと、俺の魔法は魂の・・・（以下略）」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「つまり、先ほどの貴方は、英雄、アーサー王となっていた。それでいいのですか？」

「まあ間違いはないな。」

「他の人物にもなれるのですか？たとえば、アーサー王伝説のサー・ランスロットなど。」

「まあ、その人物の知識さえあればたぶん。ちなみに、アルにもなろうと思えばなれるぞ。」

「絶対にならないでください。」

そんなに嫌か？

「ゴホン、まあまとめると、後ろで戦ってる二人に加え、あなたもバグだと言うことですね。」

いや、どうまとめたらそうなるの？

それに俺はただの人間だから！バグじゃないから！バグじゃないから！大切なことなので（以下略

結局バグに認定されました・・・。とほほ。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。（後書き）

えっと、今後使って欲しいキャラなどがありましたら、感想にお願いします。

戦争開始イィーーーー！　（前書き）

短すぎる・・・。ネタが・・・・。

戦争開始イィーーーー！

皆さんこんにちは。霧弥です。

あのバカ筋肉もといラカンの襲撃から数日が経ちました。

俺とラカンは紅き翼のメンバーとなり、ナギたちと行動を共にしてきました。

ちなみに今は戦争中です。

最近戦争がよく起こるんですよ。

そこで俺たちの出番ってわけです。もういくつも戦争を鎮火させています。

殺した人数は１００から数えるのをやめました。

最初はビビったし超鬱モードになったりしましたが、もう慣れました。

ちなみに、僕も活躍してるんですよ。

相手の飛行部隊をバベルガグラビドンで一気にペシャンコにしたり。

ソーンウィップ！ワン！ツー！スリー！・・・したり。

ＩＳ乗り回したり。

カメハメハー！だったり。

まあ、いろいろとやっているのです。

前線に出ずに傷を負った兵士達の回復に努めたりもしてました。

で！今回はなんと前線ですー。わーぱちぱち。

「なあジャック。俺は何をすればいいの？」

あ、ジャックって言うのは馬鹿筋肉のこと。Ｊ（ジャック）・ラカン。

「まあ、いつもみたいに暴れればいいらしいぞ。」

「そうかいな。アル。俺はどうしたらいい？」

後ろから「俺の言ったこと無視！？」とか聞こえてくるけど気にしない。

「そうですね。敵の本陣はナギや詠春が行くので、霧弥は敵兵をこちらの陣地の入ってこないように食い止めてください。」

「ほら！おれの行ったとおり暴れればいいんだよ！」

「ジャック。全然違うからな。お前が言うと本当にそれでいいか心配になる。」

「ッチ！しょうがねえ。俺だけで暴れてくる！」

ジャックは飛んでいった。

「じゃあ、俺も行って来るよ。アル。」

「頑張ってくださいね。」

さて、今日は誰にするかね。

ちなみに、俺の人格でも魂としゃべることが出来るんです。

一つの魂ならば、俺の魂の横に置く感じで会話が出来るんだそうです。

よく出てくるのは、ギルガメッシュですね。きっと退屈なんでしょう。

誰としゃべるかは、決められないそうです。

まあ、簡単に言えば、もう一人の僕！とか、ＡＩＢＯ！の奴と同じようなものですね。

というわけで、新しい発見だったわけです。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｅｉ（アアアアラララライッ）！！」

戦場にはやっぱり戦車が似合うぜーーー！

こういう戦争ではＦａｔｅの宝具がとても便利です。

そして今乗っているのは、第四次聖杯戦争、ライダーこと征服王イスカンダルの宝具。

ゴルディアス・ホイール。

二頭の神牛の引く雷撃を纏った戦車は敵のど真ん中につっ込み、敵の陣営を次々と崩していく。

その姿はまさに蹂躙。征服王にふさわしいで光景ある。

敵陣営の半ばまで来たとき、イスカンダルが、俺の声で声を出す。

「ん？」

どうしたんだ？何か不具合でも？

「いやな、目の前に坊主の仲間がいるんだが、このままだと轢いてしまう。

かといって止まれば集中砲火を浴びることになるからな。どうするか悩んでいた所だ。」

なるほど。どんな奴だ？ってか坊主って呼ぶな。

「やたらでかい剣を振り回しておる。」

なるほど。ジャックか。

なら轢いてもいいぞ。きっとバグだから平気だろう。きっと。たぶん。おそらく。

「わかった。多少は手加減するから何とかなるだろう。」

じゃあ、がんばって。

「ほらほら！避けぬと危ないぞ？ジャックとやら！」

「ほへ？霧弥？って、ちょっと待てええええ！のわあああああ！」

まずはじめに二匹の神牛による蹂躙。

そして、本命の戦車（チャリオット）による蹂躙。

それを終え、通り過ぎた後、後ろを向くとまだ生きていた。

体が原形をとどめている時点でものすごく手加減をしていることが分かる。

おそらく、攻撃に回す力を、速度に回したのだろう。

なら、生きていてもおかしくはない。それでも並の人間には十分脅威だが。

後で謝らないと。

「ＡＡＡＬａＬａＬａＬａｅｉ（アアアアララララライッ）！！」

征服王の声は、体は俺なのに、戦場全体にまで響き渡るほどの雄叫びだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

はい。こんにちは。あれから一日が経ちました。

昨日の戦争は大活躍でしたよ。怒られたけど。

ジャックに平謝りした後、今日のグレートブリッジ奪還作戦では、後方からの支援をすることになった。アルに言われて。曰く、

「あなたはもう前線に出ないでください！」

だそうです。

というわけで今回は後方からの支援をしているわけですが・・・。

「滅びのバーストストリーーム！」

ズギャアアアン！

「粉砕！玉砕！大喝采！」

頑張ってもらってます。社長に。

「フハハハハハァ！アルティメットバースト！」

ドガアアアン！

「強靭！無敵！最強！」

バガアアアン！

「フハハハハハハハハハハハハァ！」

ボカアアアン！

「オベリスク！ゴットハンドクラッシャーーー！」

ドゴオオオオオン！

「フフフフフフフフフ、ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡハハハハハハハハアアアァ！！」

うわぁ。なんてこった。酷過ぎる。

だが！これで終わる俺ではないのですよ！

いけ！金ぴか傲慢王！ギルガメッシュ！

「ふん。雑種どもが。この俺に戦を仕掛けるなど笑止千万。まとめ

て滅ぼしてくれる！」

いや、戦を仕掛けたのはどっちかというと俺らの方・・・。

背後に王の財宝（ゲートオブバビロン）が展開される。

そこから顔を覗かせるのは・・・・・無数の宝具の群れ。

その宝具は一気に敵の頭上へと降り注ぐ。

しかもすべてが宝具。ともなるとただの人間に防げるわけもなく、宝具の群れは次々と人を切り裂く。

そしてブルーアイズと、宝具によって大きく戦力の削られた相手の陣地に味方の軍が突撃する。もはや勝負は決まった。自分達の勝利で。

ナギたちも遠くで暴れている。ジャックなどは戦艦すら切り落としながら猛進している。

鬼神兵は、大方かたずけておいたので、詠春もゼクトもアルも、阻むものなどない。

味方の軍も、それを見て士気が上がり、敵陣に突入している。

自分の兵力。相手に兵力。陣形に地形。

その全てを把握し、味方の活路を開くことが出来るように宝具を放つ。

それが的確に行えた事で、兵士一人一人の負担が激減する。

まさに、戦場を支配していたのは、ギルガメッシュだった。

って言うか酷くね？ｆａｔｅの宝具って。

戦争開始イィーーーー！　（後書き）

ネタがなくなってきた。
主に使うキャラとかキャラとか。
頑張らないと。まだ見てないアニメも見ようかな？

何度も言うが俺はただの人間なのだｂｙ霧弥（前書き）

更新遅れました。すみません。
感想や、アドバイスなどは常時お待ちしています。

※なぜか更新しても、他のユーザー様から見ると更新されていないという事態が起こったので、一度四話をを削除し、もう一度更新しなおしました。

何度も言うが俺はただの人間なのだｂｙ霧弥

グレートブリッジを争奪してから少し経った今日。

新たにガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグらを仲間に加え、俺たちのファンクラブができ、俺に二つ名が出来たりと、いろんな事が有ったここ数日。

ちなみに俺の二つ名は、『悪魔の多重人格者』や、『戦場の殲滅悪魔』や、『青眼白龍の主』とかだ。妙に悪魔とかが多いのは不服だけど。

それで、ガトウは実力も然ることながら情報収集に長けているところがあり、そのガトウが持ってきた情報により連合、帝国。両方の国の中枢まで手を伸ばしていると言う秘密結社、『完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）』の存在が判明。

そして今、協力者にあってほしいといわれ、本国の首都（メガロメセンブリア）に来ていた。

いろいろ端折ったが、まあ、今の状況はこんな感じだ。説明が下手ですまない。

「で、協力者って誰なんだよ？ガトウ。」

「まあ、焦るな霧弥。じきに来るはずだ。」

ふ～ん。・・・・あれか？あの人は確か・・・

「マクギル元老院議員！」そう、それそれ。良く分かったな。詠春。

「あんたが協力者か？」

いや、敬語くらい使おうぜ。ジャック。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

カッカッと、音が聞こえてくる。あー。なんか緊張してきた。

≪俺も緊張してきた・・・・。≫

ちくしょう！役にたたねえ！何で今出てくるのが歩なんだよ！？

なんだ！？いつも盾に使ってる仕返しか！？そうなんだな！？

出来ればもっとこういう場面に強そうな奴であってほしかった・・・・。

≪そこまで言われるとちょっと凹むな・・・・。≫

凹んでやがれ！↑八つ当たり

でででで、だ、誰が来るんだ！？

「ウェスペルタティア王国王女・・・・アリカ様だ。」

大物キターーーーー！や、やばい・・・・意識が・・・・。

≪お、オイ！意識失うとかマジやめろよ！どんだけ緊張してるんだ

！≫

いや・・・でも・・・意識・・が・・・。

≪しょうがない！俺が出てやる！ドチクショウ！≫

その言葉を最後に俺は意識を失った。

★

俺が意識を取り戻したのは、意識を失ってから数時間ほどたってからだった。

≪お？起きたか？よかった。さっさと変われ。俺は疲れた。≫

分かった。助かったよ。ありがとう。

「・・・・っとと・・。」

ふう、まさかあんなことになるなんて・・・。

何度も言うが俺はただの人間なのだ。ナギ達と同じにしてもらっては困る。

さて、皆はどこだ？あっちかな？

・・・・・居た居た。

「おーいアル！」

「おや、霧弥。目覚めたのですね。」

「おう。俺の精神は弱かったようだ。」

「そのようですね。」

そんなあっさり肯定せんでください・・・。

「そうそう。霧弥。貴方の半生を「ワハハハハハ！」・・この話はまた今度。」

「あ、ああ。で、なに？あいつら。また殴り合いでもしてるのか？」

建物の影から覗いてみる。そこには、ジャックとナギが居た。

「上手いことやりやがって！こんガキャ！」

「ああ！？何の話だよ！？」

「とぼけんじゃねーよ！お姫様とイチャイチャワイワイお喋りして

たろーが！」

「してねーっつの！何がイチャイチャだ！！」

「なーに言ってんだ！俺なんか・・・・

『気安く話しかけるな。下衆が。』

だぜ～～～～？・・いや、ありゃいい女だぜ。一本芯の通ったな。」

「頭大丈夫かジャック？マゾかあんた？俺ぁあんなおっかねぇ女見たことねぇぞ。」

「グハハハハハハハ！そーゆートコはまだまだ可愛いガキなんだよなてめーはよ。」

「んっだそりゃ意味わかんねえ。触んなっつーの！勝負すっか？てめ。」

ギャイギャイ

こんな感じだ。なにやってんだか。

「仲いーな。あいつら。」

「おう！？詠春！？いつからそこに！？」

「さっきから居た！気づけよ！」

「すまん。詠春スマン。次からは気をつける。」

「それもう何回も聞いたセリフなんだが！？」

まあまあ、そんなとこに拘るなよ。

そして詠春、アル。頼むからあいつら止めてくれ。町一つ消し飛ぶ。

☆

あれから数日・・・・・・ナギがまたやらかした。またやりやがった。胃が痛い。

なんか外で襲われたらしい。それだけならまだ良かった。こいつは死なないだろうし。

しかし、問題はそこからだ。まさか・・・まさか、アリカ姫を連れて敵の基地を壊滅させるとか・・・。なに考えてんだあいつは！

「お前はなにやってんだこのアフォ！」

「ぐふぁ！」

どうよ。俺だって魔法使えるんだよ！アルに身体強化位教わってる

わ！

「で、でもよ！姫さんもノリノリだったぜ！？」

「うそこけっ！」

「グボア！」

本当に何を考えて「詠春さーん！霧弥さーん！」何だタカミチ。

「あの怖い冷血なお姫様が今、僕に向かってにっこり・・・。僕びっくりしちゃって・・・あ、なんか
ナギさんに御礼を伝えて、だそうです！確かに笑いましたよねっ！？」

「う、うむ。驚いたのじゃ。」

「ハ・・・・・・・？」

「な？・・・それに・・・証拠も見つけてきたぜ。」

「それは・・・！」

そこには、メガロメセンブリアナンバー2である執政官と、完全なる世界との関わりの証拠があった。

☆

俺達はその証拠のことをマクギル議員に話した。

そして議員に呼び出され、マクギル議員と二度目の対面を果たしていた。

「ご苦労だった。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ・・・・法務官はまだいらっしゃいませんか。」

「法務官は・・・・来られぬこととなった。」

え？

「あれから少し考えたのだがね。せっかくの勝ち戦だ。水を挿すのもどうかと思ってね。」

おかしい。何か違和感を感じる。アーチャー。どう思う？

≪私が思うに、あれは本物ではないな。先日見た彼からは何の力も感じなかったが、今の彼からは強大な力を感じる。たとえ先日は隠していたのだとしても、少しくらいは分かったはずだ。おそらく、彼は偽者だろうな。本物は・・・既に諦めたほうが良いだろう。≫

ありがとう。さすがアーチャー。

≪ふっ。礼は必ずしてもらうぞ？≫

ああ、わかったよ。一日体を貸してやるよ・・・。じゃあ、アーチャー。頼んだぞ。

俺は気づかれないように、アーチャーに体を委ねる。

それに気づくこともなく、議員は言葉を紡ぐ。

「いや・・その・・。私の意見ではない。そう考える物も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君たちも無念だろうがここは手を・・・「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）」なっ！？」

ドスッと、議員の腹に螺旋状の剣が突き刺さる。

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

そしてその剣に秘められた膨大な量の魔力が爆発する。

これにより議員の体は吹き飛んだ。

「ちょ、おま！霧弥！なにやってんだ！」

「いや、詠春。霧弥は間違ってねーぜ。見てみろよ。」

「やはり君は気づいていたか・・・・来るぞっ！」

視点アーチャー

爆発により起きた煙が晴れる。

そこから口元に笑みを浮かべた青年が出てきた。顔はまあ、イケメンと言わざるをえない。

≪イケメンは滅びればいいんだ！≫

「同感だ。」

イケメンなど滅びてしまえ。硫酸の中で溺死しろ。

「・・・良く分かったね『悪魔の多重人格者』。今日はどんな人格なんだい？」

「その呼び方はやめて欲しいのだが。そして私のことはアーチャーとでも呼ぶが良い。」

多重人格なのは霧弥であって、私は多重人格などではないのだからね。

「ちなみに、マクギル議員はもうメガロ湾の底だよ。」

その言葉を聞くや否や、ナギがその男に飛び掛った。

「オラァ！」

私ももう一度偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を放つために投影を開始する。

本来ならばもう少しペースを考えながら投影をしなければならない。

それは魔力が尽きてしまうからだ。

しかし、この世界の空気中には結構な量の魔力があるし、元々居た世界よりも魔力自体の密度が濃い。

それにより、魔力の消費を少なくして投影が出来る。

しかし込める魔力の量は同じなため、壊れた幻想（ブロークンファンタズム）の威力を害することも無い。私にとっては良い世界だ。

「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！」

男に向かって偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を放つ。もちろん、ナギに当たらないようにもするし、後から戦闘に参加するであろうガトウやジャックにも当たらないようにする。

角度は完璧。速度も威力も問題ない。おまけにこちらは死角だ。

当たれば死には至らなくとも致命傷にはなるだろう。そこで壊れた幻想（ブロークンファンタズム）を使えば確実に仕留められる。

まあ、それは敵側に仲間や特殊な能力が無かったらの場合だ。

・・・そして案の定・・敵の仲間は現れた。

「やらせませんよ」

敵の一人が水で偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を飲み込む。

壊れた幻想（ブロークンファンタズム）を発動はしたが、爆発ははるか遠くで起こった。

「くらえ」

そしてもう一人が炎で私とナギたちを攻撃。

ナギたちは平気そうだ。私はこれでも英霊。あの程度の炎ではやられはしない。

「強ぇぞ奴ら！」

「ハッハ。だが、生身の敵だ。政治家だなんだとガチ勝負できない奴らに比べりゃ・・・・。」

ジャックがアーティファクト千の顔を持つ英雄により大剣を出す。

「万倍！戦いやすいぜ！！」

「フ・・・・」

しかし男は攻撃どころか逃げる気配も無い。ただ、薄ら笑いを浮かべている。

何か策があるのか？

「わ、わしだ！マクギル議員だ！うむ、反逆者だっ・・・・」

「げ」

「やられたな。」

・・・まさかマクギル議員の声を使って外に連絡するとは・・・。

これで私たちは立派な犯罪者だな。ナギよ。食料の貯蔵は十分か？

もう一度偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を投影する。

ナギたちも敵に肉薄する。

だが、予め詠唱を終えていたのか、男の放つ石の槍によってその攻撃は阻まれ、逃げられてしまった。

偽・螺旋剣（カラドボルグ？）は数本ある石の槍の三本を破壊し、壊れた幻想（ブロークンファンタズム）により二本を破壊したが、敵には届かなかった。

「くそっ！」

ナギが八つ当たりに壁を殴る。

元々壊れかけていた壁は無残にも崩れ去った。

「あ～あ～。これで俺たちゃ犯罪者だな。まあ、人生波乱万丈なほうが面白いってもんよ」

「そんなに軽いことじゃないぞ。これで俺達は連合と帝国の両方を

敵に回した事になるんだからな。」

冷静にガトウが言う。

だがそれが原因となって場が静寂に包まれる。

その静寂を破ったのは、足音だった。

「居たぞっ！奴らを捕まえろ！もう全国に報告済みだ、逃げ場は無いぞ！」

くっ！連合の兵士か・・・！

「やべえっ！」

「今の所は逃げるぞ！タカミチたちは・・・ゼクトとアルに、詠春も居る！何とかなる！」

「皆。霧弥のいうとおりだ。一先ず逃げるぞ！」

ガトウが天井を無音拳で破壊する。これで何とか足止めになるだろう。

その隙をついて俺達は破壊された窓から脱出した。

やれやれ。昨日までの英雄が一転して犯罪者か・・・。

≪なんかやばいことになったな・・・。≫

他人事だと思って・・言って置くが今の私の姿は君だぞ？つまり犯

罪者は私ではなく君だ。

≪あっ・・・≫

地獄の修行／気に入られた霧弥（前書き）

どうも。まりもです。
今回、先に『神なんて嫌いだ』を投稿しようと考えてたのですが、アイデアが浮かばなかったのでこちらを投稿することにしました。
今回は戦闘がほんの少しだけ入ります。
・・・・今見てみるとテオの戦闘（グーパン）が一番多いような・・・・。
感想、アドバイスなど頂けると嬉しいです。
また、このキャラを使ってほしい！などのご要望がありましたら感想で。
できる限りの事はやりたいと思います。
ちなみに作者が使いたくないのは、ワンピース、ブリーチ、ナルト、トリコ、等です。今思いつく限りでこれだけ。（これは作者にもどうしようもありません。）
こんな作者ですが、どうかよろしくお願いいたします。

地獄の修行／気に入られた霧弥

「俺に稽古を付けてくれ。」

・・・・この一言から・・・・俺の悪夢は始まった・・・・。

俺達は帝国、連合から終われる身になった。

そろそろ、自分の身を守れるくらいの実力は付けないといけないと思う。

普段から色々なキャラに教わってはいるのだが、やはり体は一つし

かないため効率は悪い。

そこで詠春に鍛えてくれと言ったのだが・・・・・

『詠春、俺を鍛えてくれ。』

『別に良いが、なぜだ？』

『いや、自分の身を多少は守れるようにしたいな・・・と。』

『オーイ！何の話してんだー！』

『霧弥が鍛えてくれと言って来た。』

『なるほどなぁ。よし！この俺様が鍛えてやる！』

『いや、ジャック。俺は詠春に・・・ま、待て！し、死にたくない！』

『ハッハッハ！安心しろ！八割殺しで終わる！』

『せめて半殺しで！・・・いや！それも駄目だ！・・・・・あああああ！』

『む、まあ、がんばれ。生きて帰って来い。』

・・・それから毎日。逃亡の合間に修行という日々が続いた。

あ～あ。早くアリカ王女を助けに行きたいな。そうすれば修行も無くなる・・・と思いたい。

そして今もレッツ修行タイム。

「オラオラァ！避けないと死ぬぜ！」

そう言いつつ大剣をブンブンと投げてくるジャック。

なんちゅー人間砲台。死ぬわ！

「くっ！」

俺は頭上へ高速で光の文字を描く。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

言い終わると同時に一気に加速する。この魔法は便利だ。

消費魔力が少ないし、それでいて身体強化においてはこの世界の魔法より強力。

やはり世界が違うと色々と違うらしい。

兎に角、大剣を全てかわし、ジャックとの距離を多少詰める。

「求めるは雷鳴・稲光（イズチ）！」

魔法を放つ。これもこの世界のものではない。

ちなみにこの魔法には人一人を消し炭に出来るくらいの威力がある。

それを容赦なく放つ。・・・・・しかし・・・・・

「おー、あぶねえあぶねえ。」

なぜぴんぴんしているのだろうか、こいつは？化け物じゃないのか？

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」

こいつがぴんぴんしているのは何時もの事なので追撃する。

頭上に光の狼のような物が現れる。そしてその光は全てジャックに襲い掛かった。

「ラカン適当に右パンチッ！！！」

ドカアアアアアン

・・・もう言葉にならない。何だあれ？パンチ？パンチで粉砕したのか？

有り得ない。不可能だ。有り得ない。不可能だ。有り得ない。不可能だ・・・・・

ああもう！チクショウッ！

「求めるは閃光・光燐！」

魔方陣を描き魔法を放つ。

これは稲光を更に強力にしたもので、殺傷能力は段違いに高い。

更に追尾のおまけ付き。さすがにこれなら・・・・

「いってー・・・結構効いたわ。こりゃ。」

うわあああああああああ！全然効いてねええ！

「じゃあ今度はこっちから・・・・行くぜっ！」

☆

「ごふっ、がふっ。」

≪おい、大丈夫か？変わったほうがいいか？≫

歩が声を掛けてくれる。良いゾンビだな。

「いや、まあ大丈夫・・・・」

ジャックの奴やりたい放題やりやがって・・・・。

！？

いや、まて。あのジャックから自力で生還できたんだ。

俺ってひょっとして強くなってる？え？なんか嬉しくなって来た。うわっほーい。

それにしても伝勇伝の魔法は使いやすい。

様々な属性があり、発動までの時間も短い。

実は魔術も使おうと思っていたのだが、まず魔術回路が無いということを思い出し断念。

この世界の魔法はアルに教わっている。まあ、余り使いたくは無いが。

なぜかと言うとまず詠唱が長すぎるということがある。その詠唱の間に稲光がどれだけ打てるかと考えると、効率が悪い。

まあしかし、千の雷や燃える天空などの高威力の魔法は覚えて置いて損は無い。

だからアルには、稲光や光燐以上の威力の魔法を教えてもらった。

まあ、千の雷はナギに教わったが（教え方が下手すぎる。気合でどうにかなるってどう言うこと？）。

まあ、そんなこんなで今日もボロボロだ。しかし、悪いことは重な

る物で・・・・・

「ジャック！霧弥！姫さんを助けに行くぞ！準備しろ！」

「い、いや、待ってくれ・・・・せめて少し休憩をだな・・・・」

「いいじゃねえか霧弥！修行の成果を試せるぜ！」

いや、そう言われてもな・・・・。

いや、でも確かにいい機会ではある。初めて自分の力で戦うのか・・・・。

「・・しゃーない。行くか・・・・。」

幸い、骨までは折れてない。大丈夫だ。

★

「求めるは雷鳴・稲光！」

目の前の敵を稲光で倒す。うむ。やはり使いやすい。

しかしジャックめ・・・俺を夜の迷宮の裏側に放り投げやがって・・・。

なにが『そっちは任せたぜ！がんばれよ！』だ！

≪ほら、さっさと行かないとまた敵が来るわよ！≫

いや、でもなアリア。こんなところに俺をブン投げたジャックへの仕返しを・・・・

≪そんなの関係ないのよ！さっさと行く！風穴開けるわよ！≫

俺の中に居るのにどうやって風穴開けるって言うんだ・・・？

しかし・・・なぜアリアなのだろうか？

なぜか場に合わない奴が出てきたりするのはなぜだ？皆目解からん。

まあ、怖いので先へと進む。

「我・契約文を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す」

身体強化を掛け、一直線の長い通路をひたすらに走る。

敵はいない。先程の奴等で最後なのだろうか？

と、目の前に壁が現れる。行き止まりだ。

「うわ・・・行き止まりかよ・・。」

そういって引き返す。しかし、その足は次ぎの声によってとどめられる。

≪バカ！さっさと壁をぶち壊しなさい！≫

「何でだよ。」

≪あんたねえ・・・なんで行き止まりなのに敵が居たのよ！？この先に何かがあるからでしょうが！ほら、さっさと壊す！≫

「・・・・・あ！！そうか、すまん。助かった・・・。」

そういい、壁のほうを向く。

「求めるは雷鳴・稲光」

弱めに放った稲光で壁を壊す。

「妾達に何をする気じゃー！」

「ごふぅっ！？」

壁の向こうからようj・・・少女が出てきて殴りかかってきた。

それを顔面で受ける。って言うか避けられなかった。

「このっこのっ！どーせ妾達をまたどこかへ連れて行くのであろう！」

ドカッバキッ

「ゴパッ！？メパァ！？」

≪何よこの子・・・ってその子へラス帝国の代三皇女じゃないの！？≫

なんだってー！？そりゃ凄い大物にゴフゥ！

「・・・・・霧弥・・・じゃったか？助けに来てくれたのか？」

「あ、アリカ王女！そうですよブハッ！助けにブッ！来たんですバァ！？」

「そうか・・・・ナギではないのだな・・・・（ぼそっ）」

ん？なるほど。そういうことか。

「ナギがもうすぐあちら側から来ると思いまブゲラッ！？」

「！！そうか！そうなのだな！？」

なんか元気になって向こうへと向かうアリカ姫。もうナギが大好きなんだね。

「それにしてもブルァ！やめてくれないゴフッ！か？」

痛い。身体強化していても痛いものは痛い。

「む・・・・まあ、敵ではないようだし、許してやるのじゃ。その

代わり妾も連れて行け」

え・・・？戦争してる敵の国の皇女を連れて行けと？いや、まあいいけどさ。

そこっ！ロリコンとか言わない！言わないで！頼む！

「じゃ、じゃあ早くこっちに来い連れて行くから。オイ詠春。一緒に来てくれ。」

「なぜだ？霧弥一人で十分だろう？」

「あれだよ。あれ。」

助けに来たナギとアリカ姫を指差す。いい雰囲気だ。リア充爆ぜろ。

「・・・なるほど・・・分かった。」

「おーい、何が分かったのじゃ？」

「いや、なんでもないなんでもない。」

子供にはまだ早い。

★☆

ひー。イチチ。顔の傷が痛い。くそ。テオ（そう呼べと言われた）め。容赦なく殴りやがって。

あの後隠れ家に戻った俺はずっとテオの遊び相手をしていた。

しかし・・・ことあるごとに顔面を殴るのはやめて欲しい。

実際かなり痛いし、腫れるし、何よりも幼女に殴られるって言うのが精神的に響く。

だってほら。無邪気に笑いながら本気グーパンだぜ？

でもテオに悪気は無いんだよなぁ。だから頭ごなしに叱るって言うのも・・・。

だから出来るだけ平和に遊べるトランプをした。

大富豪、七並べ、神経衰弱、スピード、ばば抜き、などなど・・・。

神経衰弱などテオが気に入ってしまって・・・。神経が衰弱した。

そしてそれからやたらと気に入られて・・・。

最終決戦までテオの面倒を見ろとか言われて・・・・。

断ったらシバくって言われて・・・・・・・グスン

面倒を見たら見たで殴られるし・・・。いや、最近はマシになってきた。

髪を引っ張る程度だ。まあ、ジャックの入れ知恵でろくでもない事も覚えたのだが。

鬼ごっこをすると砂の入った球を投げてきたりするし・・・。

それぐらいならまだいい。だがジャックよ。股間への攻撃は教えるべきじゃないぞ。うん。

いきなり後ろからセコイ蹴りを入れられたときは驚いた。

もちろんジャックは能力をフルに使ってぶっ飛ばした。皆よくやってくれた。

「あはははははは！霧弥！次は何をしようかの？何か面白い遊びはないのか！？」

「う～ん？何かあるかなあ・・・？」

カードゲームなら遊戯王やバトルスピリッツが思いつくが却下。

仮にもテオは皇女な訳だし・・・教育に悪そうだ。

「じゃあ・・・・宝探しでもやるか！いいかテオ。この宝石を隠すから、それを見つけることが出来
たらテオの勝ちだ。宝石もあげよう。やるか？」

これは夜の迷宮で見つけた宝石。深い青色に輝いていて、とても綺

麗だ。

≪え？こんな子供に宝石あげるの？勿体無いわ！私に・・・≫

万年金欠魔術師がなにか言ってるが無視していいと思う。

「おお！妾がすぐに見つけてやるわ！」

「じゃあ隠すから待ってろよ。」

さ～て。どこに隠そうかな。

五分後

「見つけたのじゃ！」

≪くっ！こんな子供に宝石なんて・・・≫

あちゃ～。見つかったか。

トイレットペーパーの芯の中なら見つからないと思ったんだがなあ・・・。

テオは凄い。こういうゲームが超得意だ。本当に皇女なのか？

いや、まあ皇女だからこそ・・かもな。

ずっと王宮で過ごしてきて堅苦しい教育を受けてきたんだろう。
そりゃなんの縛りもない外は楽しいだろうな・・・。
「よしよし、凄いなテオは。」
撫でる。頭を撫でる。こうするとテオが喜ぶ。
「うへぇ・・・・」
顔を綻ばせて笑う。しょうがない。もう少し相手してやるか。
「じゃあ、次は・・・」

完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）との最終決戦まで後数日・・・・。

霧弥の日常（前書き）

今回は日常編です。

マジ感想下さい！感想に飢えてます！

霧弥の日常

ん～・・・ふぁ、朝か。

皆さんおはよう。斉藤霧弥だ。

今日は、紅き翼メンバー全員の休日。なぜかぽっかりと時間が出来た。

テオはジャックやナギと遊ぶらしく、今日は俺が面倒を見る必要は無い。

だから今日は、町へ降りて羽を伸ばそうと思う。金ならある。連合にもらった。

手早く着替え、町に行くと手紙を残して宿を出る。

最近ジャック達が活躍してるお陰で指名手配も無くなった。ありがたい事だ。

さて、まずはどこに行こうか。朝飯を食べに喫茶店にでも行くか？

喫茶店を発見。

「いらっしゃいませー」

店員の声が響く。うむ、良い声してるじゃん。

ミルクコーヒーとサンドイッチ。あと、サラダを頼む。

俺は朝は野菜を食べたい人間だ。野菜が多く入っているサンドイッチにサラダ。野菜大量。

新聞を読みながら待つ。最近やっとまともにこの世界の文字を読めるようになった。

えっと、なになに？『紅き翼、各地で大活躍！』・・・ハハハ。頑張ってるね。

む、紅き翼人気投票結果だと？これは見逃せぬ。確り見ておかねば。

一位・ナギ・スプリングフィールド　１７４６９２票

二位・アルビレオ・イマ　１３７４８５票

三位・青山詠春　９３８５７票

・・・うむ。ま、まあ、この辺は妥当かな？

つ、次だ！つぎ行ってみよぉ！

四位・フィリウス・ゼクト　８６４９２票

五位・ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ　７８４９２票

六位・斉藤霧弥　２６７８票

七位・ジャック・ラカン　２６６４票

・・・・・・・・俺は何も見てない。何も見てないぞ。

新聞をくしゃくしゃにしてポケットにねじ込む。後で焼却処分にしよう。

「お待たせしました。」

「む、ありがとう。」

朝飯がやってきた。これを食べて全て忘れよう。

む、このサンドイッチ野菜も上手いがそこに少しだけ入っている肉が美味い・・・。

サラダも美味いな。良い野菜を使っているんだろう。

食べ終わり、ミルクコーヒーを飲む。

飲み干した後、伝票を持って会計を済ませる。

さ～て。次はどこに行くかな？

ふむ、適当にぶらぶらするか。

町を彷徨う事五分。公園が目に入った。

そうだ、この公園で昼寝でも・・・。そう思い公園に入る。

芝生に寝転がる。そこでふと、ベンチに座る子供が目に入った。

・・・・少し声を掛けてみるか。

「ちょいと少年。」

「え？う、うわ！だ、誰ですか！？」

む、驚かせてしまったようだ。

「ちょ、落ち着け。俺は斉藤霧弥って言うんだ。」

「え？あの紅き翼の？お、おれ、クレイグ・コールドウェルって言います！」

「クレイグか。で、クレイグは他の子達と遊ばないで良いのかい？」

そういうと、クレイグの顔が少し暗くなる。

「おれ、引っ越してきたばっかりで・・友達とか、居なくて。友達がほしくて公園に来たけど、誰も相手にしてくれなくて・・・・。」

目に涙を浮かべるクレイグ少年。

これは年長者として見過ごせぬ。・・・・そうだ！

「クレイグ。俺が少し魔法を教えてあげよう。この世界で俺しか使えない、特別な魔法だ。」

「え？良いんですか？」

「良いんだよ。別に、知られたって困る物じゃないし。」

クレイグの顔がパッと輝く。うんうん。やっぱり子供はこうでないと。

「よし、じゃあ、まず指先に魔力をこめるんだ。・・・ああ、そんなにしなくて良い。多少指先が光るぐらいでいいから。・・そうそう。それぐらい。」

少しづつ教えていく。

「そしたら、空中に俺と同じように文字と魔方陣を書くんだ。」

クレイグが俺のを真似しながら空中に文字を描く。うんうん、うまいぞ。

「よし、書けたな。偉いぞ。」

「へへ、そ、そうかな？」

「そうだ。じゃあ俺に続いて言ってくれ。我・契約文を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す」

「え！？ええっと・・わ、我・契約文を捧げ・・えっと、大地に眠る悪意の精獣を宿す！」

クレイグの体に身体強化がかかる。

「凄い、体が凄く軽い！戦いの歌よりも強化できてる！魔力もそんなに使ってないし。」

「ははは、その魔法は結構役に立つから、確り覚えるんだぞ。特に魔方陣。」

「分かりました！頑張ります！」

ははは、素直でいい子だなぁ。テオもこうだったらなあ・・・・。

「よし、じゃあ次は稲光って言う攻撃魔法を・・・。」

☆

お昼時。クレイグは稲光を完全に覚えた。子供は覚えるのが早くて助かる。

ちなみに、修行の為の的は先程のランキング結果のページだ。

「じゃあ、クレイグ。俺は他にも行きたいから、この辺でお別れだ。」

「はい！ありがとうございました！」

「じゃあ、また今度会えたらな。風邪ひくなよ。トレジャーハンターになるんだろ？」

「はい！いつか、世界一のハンターになって見せます！」

「はっはっは。頑張れよ。」

そう言ってクレイグと分かれる。いい子だったな・・・。

さて、とりあえずお昼を食べようか。すぐ近くにあったレストランに入る。

「いらっしゃいませー」

店員の声が響く。うむ、良い声してんじゃん。・・・って、何で朝の喫茶店の店員が此処に？

まあ、とにかく今は昼飯だ。腹減った。

「龍肉のステーキとオコジョスープと、適当な飲み物を。」

「かしこまりました。」

店員が去ってゆく。俺は昼は肉を食べたい人間だ。

懐から小説を取り出し、それを読みながら飯を待つ。

小説のタイトルは『エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルの憂鬱』。

勇気ある作家がエヴァンジェリンにインタビューしたらしい。
これがまた大人気で。ナマハゲ的な扱いだったエヴァンジェリンの株が少しづつ上がりつつある。よかったね。エヴァンジェリン。
と、読んでいるうちに料理が来た。いただきます。
龍肉のステーキ。龍肉は硬めで、口の中に長く残るが、奥まで染み渡ったたれの味が良く、美味しい。
付いて来たご飯がすぐに無くなる。大盛りにすれば良かった。
オコジョのスープ。オコジョとは妖精ばかりじゃなく食用にも使われる。
一口飲む。美味しい。オコジョの肉を食べる。こちらは龍肉と違い軟らかくて脂が乗っている。これはスープだけでなくステーキや煮物にも使えるのではないのだろうか。
全て平らげた後、紅茶をすする。ほんのり甘くて美味い。
伝票を持ち会計へと向かう。
「３７００ドラクマになります。」
結構高いね。ステーキが原因かな？
店を出て、またぶらぶらと彷徨う。あ、アイス食いてえな。
近くの店でアイスを購入。歩きながら食べる。美味いな、イチゴ味。

少し森に入る。先程何か殺気のようなものを感じたので稲光を打っといた。

あ、オコジョが居る。・・・・・捕まえた！

ふむ、先程まで食していた物を抱くというのも中々複雑な気分だ。

それにしても尻尾が長いな。頑張れオコジョ。世界を狙え。

オコジョを逃がす。すぐに見えなくなった。

む、また殺気を感じる。先程と同じ物だ。目を覚ましたか？

「雷の暴風！」

雷の暴風が飛んでくる。

「求めるは閃光・光燐」

光燐で相殺し、

「求めるは雷鳴・稲光」

稲光で攻撃する。直撃した。帝国の人間かな？なんだ、あっけなかったな。

ジャックとの戦闘を生き延びた俺をなめるなよ。

ふああ・・・もう夕方か。宿に戻ろうかな。

ゆっくりと歩きながら宿を目指す。宿に着いたのは一時間後だった。

「霧弥！早く食おーぜ！」

ナギが急かす。少し急いで宿の食卓に座る。

野菜炒めが美味しい。シンプルだけど美味しい。

「霧弥、今日はどこへ行っていたのですか？」

アルが聞いてくる。

「いや、ただぶらぶらとうろついてただけさ。何もしてないよ。」

「そうですか。」

そのまま食事を勧める。ごちそうさま。

ふう、今日一日、凄く疲れた。寝ようか。

俺はベッドへと入り、すぐに寝た。

なぜか夜になってアルが外出していたが、気にしない様にした。

ゼクト、市場へ（前書き）

日常のゼクト編です！
もう駄目だ。死ぬ・・・。ゼクトを描くのがここまで苦しいとは・・・。
恐らく、『こんなのゼクトじゃない！』って言う人がいると思う・・・。
ボクは頑張ったよ。頑張ったんだよ。
あ、あと物凄く感想に飢えています。感想欲しいです。
アドバイスでもご指摘でも何でも感想が欲しい。

ゼクト、市場へ

ワシの名はフィリウス・ゼクト。紅き翼の一員じゃ。

今日は戦いも無く、情報収集などもアルビレオ達で十分らしく、暇が出来た。

暇が出来たのはナギ達戦闘員に霧弥。そしてワシじゃ。どうしようかのぅ・・・

『アルビレオ』

念話をアルビレオに繋げる。

『ゼクトですか。何の用でしょうか？手短にお願いします。』

情報収集が忙しいのじゃろうな。ワシも行ったほうがよいかの？

『そちらの状況を聞こうと思ってな。どうじゃ？ワシも行ったほうがいいか？』

『いえ、別に構いませんよ。ゆっくりしていて下さい。・・・そうだ、最近大きな市場が出来たという話を聞きました。そこへ行ってみてはどうでしょう？』

『市場・・・か。どうせ暇じゃしの。行ってみるとしよう。』

『楽しんで来てくださいね。』

『うむ。』

念話を切る。ふむ、市場か・・・。

今ここには・・・誰も居らぬか。しょうがない。

置手紙でも残していくとしよう。ええと、市場へ行ってくる・・・と。

置手紙を置き、宿を出る。

む、そういえば場所を聞いていなかったのじゃ。・・あの少女にでも聞いてみるかの。

「すまぬが、道を訪ねても良いじゃろうか？」

「ん？なにボク？迷子？」

ま、迷子じゃと・・・この少女、ワシを子供だと思っておらぬか？

「いや、迷子でなく、道を聞きたいのじゃが・・・」

「そう？どこまで行きたいのかな？」

頭を撫でられる。いや、悪い気はしないのじゃが、やはり子供じゃと思われとるな・・・。

「最近出来たという、市場へと行きたいのじゃが、道が分からなくて困っていたのじゃ。」

「ああ～。市場ね。それなら、そこの角を右に曲がって真っ直ぐよ。」

「すまぬ。助かった。」

「いいのよ。じゃあね～。」

少女が去って行く。訂正すべきじゃったのかのう？ワシは子供ではないと。

少女に言われたとおりに進んで行く。まず右に・・・と。

そこから五分程度歩いたところで、人通りが多くなった。

おそらくここが市場なのじゃろう。確かに大きいのう。

さて、まずは腹ごしらえじゃな。何を食おうかのう・・・。

屋台などはいっぱい出て居るし、食物を売っている店もある。悩むのう。

少し歩く。あちらこちらから良い匂いが漂ってきているものの、どうにも食べる気にならない。そこで

ふと、見たことも食べたことも無い料理の名前が描いてある看板を見つけた。

（らーめんとは、どう言うものなのじゃ？）

数百年生きてきた自分が見た事も食べたことも無い料理。興味がそそられる。

元々腹も減っていたし、丁度良いと、その店に入る。

「いらっしゃい！ご注文は？」

メニューを見渡す。しょうゆラーメン、味噌ラーメン、とんこつラーメン。

他にも色々とあった。正直すぐに決めることは出来ない。

（確か・・この前鍋を食べたときにしょうゆという物を使っておったな。あれは旨かった。）

以前鍋を食べたときに、しょうゆという旨いたれを食べたことを思い出す。

「では、しょうゆラーメンを貰おうかのぅ。」

しょうゆラーメンを頼む。どのような料理なのかは分からないが、楽しみだ。

席に着き、周りを見渡す。周囲の人々が食べているのを見ると、らーめんという物が麺料理だということが分かる。しょうゆラーメンとは、しょうゆの汁につけた麺のことなのだろうか？

（食の文化は進化が早いのう・・・数十年前までは龍足の丸焼きなどもあったのじゃが・・・。）

こういう新しい場所へと赴くと、時代の変化を感じる。

魔法も、新しい魔法などが増えたし、文化も変わる。数百年生きていると、それを見るのが楽しく思えてくる。次はどうなるのか・・・と。

「しょうゆラーメンお待ちっ！」

ピチャっと多少汁を飛ばしつつ目の前にラーメンが置かれる。

熱い汁に黄色く細い麺が所狭しと浸かっている。他に、野菜や肉も入っている。

いい匂いがする。鍋のような料理かと思う。鍋に煮た食材なども入っているし。

箸を持ち、麺をすくう。そして少し覚ましたあと、口に運ぶ。

「！？・・・・こ、これは・・」

それは、物凄く旨かった。いままで食べたどの食物よりも美味しく感じた。

夢中で、麺を口に掻き込む。これほど美味しい物だとはおもわなんだ。

現代の食文化、恐るべし。

思う存分堪能し、店を出る。

勘定の仕事をしていた男がくれた飴玉を口に入れ、また歩く。

（今度は、適当にいろんな場所を回ってみようかのう。）

そう思い至り、市場全体を回る。

恐らく各国から集められたであろう野菜や果物。日用品まで多種多彩なものがあった。

果物を少し買い、歩く。

（ん？服屋か・・・。そういえば、ワシは何時も同じ柄の服じゃのう・・・。そうじゃ、新しい服を買ってみることにしよう。なかなか楽しいやもしれん。）

「いらっしゃいませ！・・・・ってあれ？子供？」

（やはりそう来るか・・・・もう気にせん。）

吹っ切れた人間は強い。主に精神的な意味で。

「新しい服が欲しいのじゃが・・・ワシは生憎そういうのに疎くての。見立ててくれんか？」

「服？分かったわ。お姉さんに任せなさい！」

ドンッと胸を叩く少女。何か嫌な予感がするのう・・・。

案内された試着室の前で待つ。数分で、少女が服を数着持ってきた。

「じゃあ、これを着てみて？似合うと思うわ。」

「うむ、分かったのじゃ。」

服を受け取り試着室へ入る。ふむ？最近の男子はこのような服を着るのかのう・・・。

服を着る。服を着終え、試着室から出る。

「どう？上手く着れたかしら・・・わあ、可愛いじゃない！」

「そ、そうかのう？」

鏡を見る。服はピンク色で少し文字が書いてあり、ズボンは太ももまでしか丈が無く、肌の露出が多い。分かりやすく言うと、女の子の可愛い服だ。

ゼクトは首を傾げて考える。こんな物が男物の服なのか・・・と。長い歳月を生きているのに、この辺りの知識は無かった。

「・・・・・・！！」

「ど、どうしたのじゃ！？尋常じゃないくらいの鼻血が・・・！」
「なんでもない。なんでもないのよ。それより、おねーちゃんって呼んでみてくれない？」
「む？え、えーっと、お、おねーちゃん？」
「ブハッ」
「だ、だめじゃ！既に致死量レベルじゃぞ！早く病院に・・・・・！」
「大丈夫・・・大丈夫なのよ・・・。」
店員はユラリと立ち上がる。その姿はゾンビを思わせる光景だった。
「そ、そうか？ならばいいのじゃ。では、これを貰おうかのう？」
「せ、千二百ドラクマになります。」
金を払い、店を出る。あの少女は大丈夫だろうか？明らかに致死量レベルの血を流していたが・・・。
後ろから騒ぎが聞こえる。気にするまい。
しかし、この格好だと足がスースーする。いつもはジャージだから、違和感がある。
（しかし、せっかく選んでくれたしのう・・・。）

せっかく選んでくれた物を、すぐに脱ぐわけにも行かない。少しの我慢だ。

少し行くと公園を見つけた。ベンチに座り、少し休む。

（少し疲れたのう・・・。ん？あれは霧弥か？）

少し目を凝らすと、それは確かに霧弥だった。隣にいる子供に、魔法を教えている。

（確かあれは・・・稲光じゃったかのう？あの発動の速さであの威力というのには驚いた。）

霧弥の使う魔法は自身の物よりも発動が早く、威力もそこそこある。しかも発動も簡単だから、使いやすい。

それを子供に教えていた。

（あれは、子供に教えてもいいものなのかのう？）

確かに、かなり殺傷能力の高い魔法だ。子供には危険過ぎる。

まあ、霧弥のことだから何か考えがあるのかもしれないが。

しばらくその光景を眺める。その子供はすぐに稲光を使い、霧弥を驚かせていた。そこでふと思う。

（ワシは霧弥に勝てるかのう？）

恐らく勝てる。しかし、それはあくまで霧弥自身の場合。霧弥が能力を使えば勝てる気がしない。

（何しろ、ドラゴンや巨人を召喚したり、強力な武器を大量に発射したり出来るからのう・・・。あれの原理は分からんが、勝てる気がせんわ。）

グレートブリッジでのドラゴン。同現場での武器の乱射。乱射だけならば怖くないが、一つ一つにこめられた魔力は計り知れない。あれにこめられた魔力で千の雷が何発打てることやら。確実に五発は打てるだろう。

もう一度、霧弥の話をまじめに聞く子供と、教える霧弥を見る。

今度は軽く模擬戦をするようで、向かい合っている。

子供が身体強化を使い、それを見て霧弥も身体強化を使う。

子供が稲光を放ち、霧弥が稲光で相殺する。

その後、多少動いた後にまた思案顔になり、話し込む。

あの二人は、周りが酷いことになっていると言うことに気がついているのだろうか？

地面が抉れ、ブランコの鎖が切れている。

しかし、それに気づくことなく相談する二人。

関係者だと思われたくないので、見つかる前にトンズラする。

見つかって怒られるのはあの二人だけでいい。

（・・・今日は疲れたのう。市場へ行くなど久しぶりじゃったからのう・・・。）

宿に着いた。ロビーには紅き翼の面々。

「皆。かえったぞ。」

紅き翼の面々が振り向く。・・・が、すぐに固まった。一番先に口を開いたのはアルビレオ。

「ゼクト・・・どうしたんですか？その服は。」

「町の服屋で見立ててもらったのじゃ。似合っておるかのう？」

くるりと一回転。

「お、お師匠・・・。」

「ゼクト・・・」

「おい、何だよそりゃ！ブプッ」

「お主・・・なぜ女物の服を着ておるのじゃ？」

ナギに驚愕の目で見られ、アルビレオに呆れられ、ジャックに笑われ、テオドラに聞かれた。

「お、おかしいのかのう？」

「おかしいも何もお師匠。それ、女の子の服だぜ？」

「そ、そうじゃったのか！？は、早く着替えんと・・・」

パシャッ

その音が鳴り響く。

「最近旧世界ではカメラという物が流行ってるのですよ・・・。」

アルビレオが、写真を撮っていた。

「あ、アル！それを貸すのじゃ！」

「駄目です。ゼクトのファンクラブの方々に差し入れしましょう。きっと喜ばれます。」

「や、やめるのじゃ！」

「フフフフ・・・さあ、ファンクラブ本部へと行きましょうか。」

「そ、そんなもの聞いたこと無いんじゃが！？と、とにかく止めるのじゃー！」

ゼクトの叫びが、宿に響いた。

某所

ガチャッ

「こんにちは。」

「む、アルビレオさんか。新しいブツを持ってきてくれたのかい？」

「みなさん、これを。」

アルは写真を取り出す。

「こ、これは！」

「これをあなた方ゼクトファンクラブに寄付しようと思いまして・・・。」

「ほ、本当か！？いくら欲しい！？」

「今回は特別に無料としましょう。大事に扱ってください。」

「お、おお！助かる！皆の物！これを見よ！」

「「「「「「「「「なに？今ゼクトきゅんのビデオ見てて忙しいんだけど。」」」」」」」」」

「そのゼクトきゅんの女装写真だあああ！」

「「「「「「「「「なにいいいいいいいいいい！？」」」」」」」」」」

大勢の女性が駆け寄ってくる。そして・・・・

「「「「「「「「「「「「「ふぉおおおおおおおおおおおおおお！！」」」」」」」」」」

一部は覚醒していた。

「「「「「「「「「「「「「ブハァッ！？」」」」」」」」」」

一部は致死量にまで鼻血を噴出していた。

その他にも多種多様な反応があったが、ある一点に置いて一致していた。

ここには・・・・まともな人間はいない！

ゼクト、市場へ（後書き）

やばい・・・日常書くのってしんどすぎる。
ちなみに、他のメンバーの日常があるかは謎です。
霧弥は書くと決めていましたし、ゼクトは書きたくて書きました。
ジャックとかは・・・日常ありますかねえ・・・？

霧弥の能力で使われた武器や魔法の説明（前書き）

ちょっとした説明会です。
間違いなどありましたらご指摘ください。

霧弥の能力で使われた武器や魔法の説明

『求めるは雷鳴・稲光』

（もとめるはらいめい・いずち）

伝説の勇者の伝説に登場するローランド帝国の魔法。
魔方陣の中心から雷を発射する。
光燐に比べ、殺傷力、命中精度は劣る物の、使い勝手が良く、習得難度も低い。
霧弥はよくこの魔法を使用する。

求めるは殲虹・光燐

（もとめるはせんこう・くうり）

魔方陣の中心から追尾性能のある光線を放つ魔法。
稲光より威力、命中精度ともに優れており、個人で発動する魔法の中ではトップクラスの威力を誇る。稲光よりも殺傷能力がある
霧弥は、相手に稲光が通用しないときなどにこの魔法を使う。
しかし、ジャックやナギ等の公式チートを倒すほどの威力は無い。

我・契約文を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す

（われ・けいやくぶんをささげだいちにねむるあくいのせいじゅうをやどす）

使用した者の脳の抑制を外し、身体能力を一時的に向上させる。使い終わった後はかなりの体力が奪われるが、霧弥は発動時間を極力短くすることで反動を最低限にまで抑えている。高等魔法であり、伝説の勇者の伝説の作中ではエスタブール王国のエリートのみが取得可能であった魔法。

我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ

（われ・けいやくぶんをささげてんくうをおどるひかりのまじゅうをはなつ）

術者の頭上から不定形の狼のような獣を出現させ、放つ。不定形といっても、触れることは出来るので噛み付いて引きちぎるなどの攻撃をする。

王の財宝

（げーと・おぶ・ばびろん）

術者の背後から数々の宝具を射出、または取り出す宝具。

本来の持ち主は古代ウルクの王ギルガメッシュ。
この世全ての財が収納されているとされ、全ての宝具の原点がこの倉庫にある。
中には酒や船などといった物もあり、武器以外にも入っている物がある。

神威の車輪

（ごるでぃあす・ほいーる）

第四次聖杯戦争にライダーとして召喚された征服王イスカンダルの宝具。
二頭の神牛『飛蹄雷牛（ゴッド・ブル）』に牽かれる戦車。
雷を纏い突進する『遥かなる蹂躙制覇（ヴィア・エクスプグナティオ）』による蹂躙走行は物凄い破壊力を秘める。ウェイバー曰く爆撃機並み。

約束された勝利の剣

（えくすかりばー）

セイバーのもつ持つ剣。真名開放することで高威力の魔力の本流を生み出す。

すべて遠き理想郷

（アヴァロン）

セイバーの最強宝具。外部からの攻撃を完全に無効化し、更に所有者の老化を止め、傷を超速度で治す。

ゾンビ

（ぞんび）

相川歩の固有スキル。
冥界のネクロマンサー、ユークリウッド・ヘルサイズによってもたらされたゾンビとしての力。傷を受けても再生するが、腕などが千切れた場合、腕をくっ付ける必要がある。
また、人間は無意識に力をセーブしているが（体の崩壊を防ぐため）、ゾンビであるから体のことを心配せず攻撃を繰り出せるため、百パーセントの力を出せる。また、限界を突破し、三百、四百と人間離れした力を発揮できる。
日光に弱く、日光に当たりすぎるとカサカサに萎れてしまう。

こんなところですね。また、機会があればやろうと思います。

開戦　完全なる世界（前書き）

こんばんは？まりもです。
今回は予定通り完全なる世界との開戦・・・なのですが。
自分の文章に自信がありません。ええ、まったく。
戦闘描写って難しい・・・。
セリフ書くのも難しい。
凄く疲れました。疲れたわりに凄くいい話が出来たというわけでもなく・・・。
うん。寝よう。そして気分を入れ替えよう。
※最近感想を数人の方々が送ってくださいました。感謝感謝です！

開戦　完全なる世界

～ある日ある宿にて～

「では、皆さんに伝えておくことがあります。」
と、アル。
「完全なる世界（やつら）との決戦のことじゃな。」
と、ゼクト。
「そうです。しかし、残念ながら帝国、連合の正規軍の説得は間に合いそうもありません。」
「まあ、それはそうだな。それまでいがみ合ってた仲なのだから」
と、詠春。
「ま、俺たちゃ目の前の敵をぶっ潰せばいいんだろ？」
いつも通り適当だが、かなりやる気なジャック。
「完全なる世界（やつら）を倒して、姫子ちゃんを救出だよな。」
前々から黄昏の姫巫女のことを考えていたナギ。
「で、個々の役割はどんな感じなんだ？」
最後に俺。
「残念ながら、ガトウは連合の正規軍の説得へ行っていて、間に合いそうもありません。」

ガトウが不在・・・・数にしてみればたった一人の損失だが、戦力で言うと物凄い損失だ。

「ですので、ガトウ以外のメンバーで挑みます。一応、敵の数は把握してますので役割は決めていま
す。まず、炎の男ですが、あれはラカンに頼みます。」

「おうっ！まかせな！」

炎はジャックか・・・なんか、アルを見てると筋肉対筋肉という理由でそうしたように思えてくる・・・。

「そして、水を使ってくる男はゼクト。貴方に頼みます。」

「了解したのじゃ。」

ふむ、これが妥当だと思う。残りの人数を見れば・・・。

「そして雷を使う男。彼は詠春に任せます。」

「分かった。あれとは一度戦ったからな。どうにかなると思う。」

ふむふむ・・・あれ？雷を使う男？そんな奴見たこと無いなあ・・・。

「私は、黒いフードの敵を相手にします。そして霧弥ですが・・・・」

「ん？」

俺は・・・なんだ？

「霧弥の任務は、黄昏の姫巫女の救出。及び姫巫女を安全な場所まで連れて行くことです。」

重大な任務来た。重大な任務来た。大事なことなので（ｒｙ

「おいおい、俺なんかをそんな重大な任務に置いていいのか？俺なんかその辺の兵隊にも負けるかもしれないような貧弱な人間だぞ？」

「そこは能力でパパッと。」

「軽いなオイ！？」

ふー。まあいい。頑張ってみよう。

「となると、あの糞イケメソは・・・・」

「俺がやるってことだな」

ナギが言う。

「そうです。恐らく彼がラスボス・・・全ての元凶でしょうから、必ず倒してください。」

そう。メインはあいつだ。あいつをナギに倒してもらって、俺が姫巫女を救出。

それで儀式は止まり、全てが終わるはずだ。

「では、決戦は明日。皆さん。明日に備えて早く寝たほうが良いと思いますので、これで解散にしましょう。」

その言葉を皮切りに、皆がそれぞれの部屋へと向かう。

そして皆、何かを考えながら自室に戻り、眠ってしまった。

（明日、どうなるかなあ・・・。姫巫女の救出。これまた難しい問題だ・・・。）

≪なに、君なら出来るさ。≫

ありがとう。アーチャー。

≪君は仮にも神に能力を貰った人間だ。それが勝てない道理など無いだろう？≫

そうだな・・・。頑張らないとな・・・。

俺はそう思いつつ、軟らかいベッドに入り、眠った。

頭の中は、明日の決戦のことでいっぱいだった。

～夜中～

「ふわぁ～～」

俺は一度眠ったんだが、数時間ほどで目が覚めてしまった。
で、気分転換にトイレにでも行こうかと思ったんだ。
生前のホテルのようにトイレが設備されているわけでもなく、外にある。
そして今俺は砂利の敷き詰められた道を歩いているんだ。

「ふあ・・・やっぱ緊張してるのかな？俺。・・・・ん？」

少し物思いに耽りながら歩いていたとき、備え付けのベンチに座り、星を眺めているナギを発見した。

「ナギ」

「ん？ああ、霧弥か。」

なぜかいつものような元気が無いナギ。

「明日の決戦の事か？」

「ああ、少しそのことで悩んでてよ・・・。」

珍しいな。ナギが悩み事なんて。

「俺さ・・・今になって戦争で自分が死ぬんじゃないかって思えてきて・・・。」

「うん？」

「奴らは別格だ。たぶん今まで戦ってきた敵のどいつよりも強い。俺だって負ける気はないんだけどよ、やっぱり怖いんだよ。死ぬんじゃないかって・・・な。」

「珍しいな。ナギがそんなことを思うなんて。」

いつもなら『俺は無敵の千の呪文の男（サウザンド・マスター）だ！』って言って笑ってるだろうに。

「今までなら、死ぬのなんて怖くなかった。俺も何百人と殺しているんだからな。」

そこでナギは口を閉じる。
しょうの無いやつだな。

「じゃあ、アリカ姫と一緒に逃げるか？ナギ。」

「んなっ！？し、知ってたのかよ！」

「皆知ってると思うがなあ・・・。で、だ。逃げたいのならアリカ姫を連れて逃げればいいじゃねえか。皆には俺から言っておくぞ？まあ、アリカ姫にゃ怒られるだろうがよ。」

「・・・そんなこと、出来るわけがねえ。俺が逃げたら、世界が滅ぶかも知れないし、何より、姫さんもそれを望まない。俺は、姫さ

んと一緒にいる。なんたって俺は、姫さんの騎士なんだからな。」

「じゃあ、アリカ姫のために、自分のために戦えばいいじゃないか。世界を救って、自分も生きて。それから、アリカ姫に告白なりなんなりしてくっ付いちまえばいいじゃねえか。」

「くっ付いちまえって・・・・それが出来たら苦労しねえっつーの！」

「だから、それが出来るようになればいいじゃないか。確かに、今のままじゃ結婚どころか恋人関係にもなれないだろうよ。身分上。けど、世界を救った英雄ならば、姫との結婚も認められるはずだ。だから、先のためにもさっさとあのイケメソをぶっ飛ばして来い」

正直なところイケメソを吹き飛ばして欲しいです。メタメタに。

「・・ああ、そうだな！ありがとよ、霧弥。お前も明日、頑張れよ！」

「ああ、まあ、姫巫女の救出だけだからな。何とかなるさ。」

そう言って走り去るナギを見送る。やばい、トイレトイレ・・・・。

～翌日～

「不気味なくらい静かだな。奴ら。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

ナギとジャックが言葉を交わす。ナギにはもう昨日のような弱音は感じず、いつものように『俺が最強だ！』みたいな感じになっている。

今いるのは完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）の本拠地、墓守人の宮殿。

ぶっちゃけて言えばラストダンジョンだ。

俺達はここに挑む事になる。紅き翼と、連合、帝国の正規兵ではない兵士と、中立国のアリアドネーの本隊の混成部隊。

「ナギ殿！混成部隊準備完了しました！」

アリアドネーの代表が報告に来る。そうか、もうすぐ開戦だな。

「おう、あんたらが外の召喚魔達を抑えてくれれば、俺たちが本丸に突入できる。」

「ハッ・・・そ、それで、ナギ殿。」

「ん？」

どうしたんだろうか？

「ササ、サインを頂けないでしょうか？」
う、羨ましい！こんな可愛い子にサインを求められるとか・・・チクショウ
「ああ、いいぜその位。」
「あ、ありがとうございます！そ、尊敬していました！」
ああ、羨ましい・・・。
「ウハハハハハハ、嫉妬か？霧弥！」
「うるさい。お前なら分かるだろ。この気持ち。」
「まあ、俺もあんなカワイコちゃんにサインねだられてえけどよー。」
これは、人気ランキングのドン尻にのみ分かる気持ちだろうよ。
向こうでは、詠春とアルがガトウと連絡を取っている。
表情を見る限り、連合の正規兵は動いてくれなさそうだ。なにやってんだか。
この世界自体が滅びるかもしれないって言うのにな。
さて・・・・開戦だっ！

「よおし、野郎共・・・・いくぜっ！」

ナギが飛ぶ。俺たちもそれに続き、空を駆ける。

俺は途中から皆と離れ、宮殿の裏手に回る。ここから姫巫女を奪取しに行く！

（モード、一方通行（アクセラレーター））

魂を塗り替え、宮殿へと突入する。

（確かここから一本道のはずだ。気を付けて行けよ。罠があるかもしれない。）

「俺を誰だと思ってやがンだ？テメェ」

（おお怖い怖い。まあ、心配ないとは思うけどさ。）

一本道を進む。そこでついに、罠が現れ始めた。

カチッ

「ァン？」

何かのスイッチを踏んだかと思えば、四方から魔法の射てが降り注ぐ。だが・・・

「罠ってェのはこんなチンケな物ばかりなのかァ？」

霧弥の体に触れた瞬間に弾き返される。いや、反射される。

これが一方通行の能力。ベクトルの変化。

触れているあらゆる物の向きを変える事ができる。まあ、反射だと思っていればいいと思う。自身に触れるものの向きを変えることで攻撃は当たらない。

そのまま罠という罠を破壊しながら進む。罠は大量にあったが、意味はなかった。

なんと言う強さ。まさにチート。

そして、開けた場所に出る。目の前には、黄昏の姫巫女。

「じゃあ、俺はここまでいいンだな？」

（ああ、ありがとう。）

人格を元に戻す。さて、姫巫女の救出だ。

「これは・・・破壊すればいいのか？」

姫巫女を捕らえている結界。破壊して姫巫女を助け出そうか・・・。

「求めるは殲虹・・・・・・（ドスッ）え？」

俺は光燐を放ち、姫巫女を救出しようとしたが・・・いきなり腹に

激痛が走った。
その腹を見てみると・・・そこには、黒い布のような物が刺さっていた。
「ぐふっ・・・な・・んだ？」
地面に倒れる。首を動かし、背後を見る。そこには、全身に黒尽くめのフードを纏った者。
（くそっ、まだ敵がいたか・・・。モード、相川歩。）
ゾンビパワーで傷を癒す。毎度ゾンビパワーには世話になるな。
（歩！勝てそうか！？）
「・・・分からん。見たところ、肉弾戦に強いようには見えないが・・・。」
（とにかく、攻撃あるのみだ！）
「そうだな。」
霧弥（歩）は敵に肉薄する。そして、右の拳を叩き込む。
「１００パーセント！！」
人間が出せる限界の力で敵を殴る。しかし、その拳は敵には届かなかった。
敵に届く前に、霧弥の右腕は肩の辺りから切断されていた。

「くそっ！」

後退し、腕をくっ付ける。

（モード、ランサー）

今度は第五次聖杯戦争のランサー。真名はクー・フーリン。

「ハン！おもしれえ事になって来たな！行くぜっ！」

さすが最速の英霊。かなりのスピードで敵へ近づく。

「オラオラオラオラァ！！」

手に持つ槍。ゲイ・ボルグを連続で突き出す。

しかし、それは幾重もの障壁によって防がれる。

「なんだ！？あの障壁は？」

（たぶん、障壁をいくつも展開しているんだと思う。ランサー、一転に集中攻撃だ。）

「そうか。ならもう一度いくぜっ！」

「オラァ！」

もう一度連続での刺突。だがそれは・・・

「なにぃっ！？」（なんだって！？）

黒尽くめのローブに相殺される。クッ何も出来ない！せめて障壁をなくさないと・・・！

一度人格を元に戻す。

「求めるは雷鳴・稲光！」

床に稲光を放ち、目晦ましにしてから距離をとる。

「モード、ライナ・リュー・・・ガッ！？」

敵の背後に大量の魔方陣が展開され、砲撃が大量に放たれる。

俺はそれに飲み込まれ、床をバウンドしながら転がる。

ぐっ・・・能力使ってない状態だとヤバイな・・・。

「ぐ・・・・くっ！」

やばい。敵わない。こいつはあの炎のゴリマッチョやイケメソとは段違いだ。

明らかにあいつらの頭一つや二つずば抜けている。

≪我(オレ)も奴に勝てるかどうかはわからんな。≫

ギルもそう思うのか・・・。そりゃ相当なもんだ。

ならば、せめて姫巫女だけでも！

視点　ナギ

「ハァ・・・ハァ・・・」

目の前のアーウェルンクスとか言う奴の首を掴み、持ち上げる。

「見事・・・理不尽なまでの強さだ。」

「黄昏の姫巫女は・・どこだ？消える前に吐け。」

霧弥が失敗するとは思わねえし、儀式も中断されている。

けど、もしもの場合がある。こっちが終わったら霧弥の所へ行くとアルも行っていた。

ジャックや詠春。お師匠やアル達も勝ったらしく、こちらへ向かってきている。

そんな絶望的な状況の中、アーウェルンクスは笑みを浮かべ・・・

「フ・・フフフ。まさか君達は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん・・だと!?」

こいつがラスボスじゃないってのか?

ドガァァン

「なにっ!?」

詠春が声を上げる。急に宮殿の壁が大破した。そこから出てきた人影・・・

「「「「霧弥!?」」」」

霧弥に体が、目の前に投げ出される。全身ボロボロだ。

その後から出てくる黒尽くめの奴。あいつが霧弥をやったのか・・・!?

「あ・・・アル!」

「霧弥!安静にしてください!死んでも可笑しくない傷なのですよ!?」

「俺より・・・この子を・・・」

「!!黄昏の姫巫女ですか。・・・解かりました。隠れ家まで転移させましょう。」

霧弥・・・姫子ちゃんを守ってあんな事に・・・。

姫子ちゃんが転移される。だが、まだ儀式は中断中。こいつを倒さなきゃ意味が無い。

って、何だこの馬鹿でかい魔力！？あいつが何か・・・

そう思った瞬間、極大の砲撃が放たれる。狙いは俺だ。

ヤバイ、かわせない・・・。ここで終わっちまうのか！？

そう思ったとき、目の前に一つの人影が現れた。

視点　霧弥

「ガハッ・・・」

脇に姫巫女を抱えて走る。魔法が背に当たる。

あの後少しの隙を付いて幻想殺し（イマジンブレイカー）で結界を破壊し、姫巫女を掻っ攫った。その後だが、絶え間なく続く攻撃のせいで能力を使うこともできず、ただただ自力で逃げ回っていた。ジャックとの修行も無駄じゃなかったってことだ。

「ぐっ・・・うわっ！」

絶え間なく続く攻撃。とにかく出口へと向かう。

と、後ろから轟音。振り向くと、通路全体を飲み込むようにして砲撃が迫ってきた。

オイオイ、マジかよ・・・。

姫巫女を腹に隠し、魔力で身体強化を掛けて耐える。

とにかく、あいつに姫巫女を渡してはいけない。

体が吹き飛び、壁にぶつかる。壁が砕け、外に放り出される。

お、ナギ達じゃないか。丁度いいや。ナギ達が何か行ってるが、とにかくこっちだ。

「あ・・・・アル！」

声を出すのも一苦労だ。

「霧弥！安静にしてください！死んでも可笑しくない傷なのですよ！？」

え？俺ってそんなに重体だったのか？

「俺より・・この子を・・」

アルは俺の腕の中の姫巫女に気づき、姫巫女を転移させる。

良かった。人安心だ。

（モード、ダニー）

「く・・いてぇ。ジオルク」

ダニーの力は攻撃能力は無い。だが、自身の肉体の完全治癒という強力な力がある。

・・・・・よし。直った。

ナギ達はどうしているのだろうか？・・・ってオイ！

先程以上の砲撃が放たれそうになっている。ナギは反応が遅れてかわせない。

「うおおお！」

俺の体の操るダニーがナギに覆いかぶさる。意思の共有って言うのは便利だ。

背中に砲撃が当たる。消し飛びそうな威力だ。

「ジオルク！」

再生。そしてまたダメージ。

「ジオルク！ジオルクジオルクジオルクジオルクジオルク！」

幾度も幾度も再生、ダメージ、再生の繰り返し。

「ア・・・・」

砲撃が止むと同時に、ダニーの意識が消え、体が俺に戻ってくる。

ああ、チクショウ。凄く痛い。背中が抉れてるかのように痛い。

いや、実際に抉れているのかもしれない。まあ、とにかくナギは守れた。

ナギの驚愕の顔を見ながら、俺は意識を手放した。

開戦　完全なる世界（後書き）

少しアンケート的なことをしたいと思います。
皆さんご存知？の通り霧弥はネギま以外の世界にも行くことになります。
そこで、次の世界を決めようと思うのですが、中々思い浮かばないのでこのアンケート的なことをしたいと思います。
内容は霧弥の行く世界はどこがいいか。感想に書いてくださると幸いです。
期限は・・・次の世界が決まるまで。決まった時点でお知らせします。
出来れば、ジャンプ作品以外を送ってくださると幸いです。
作者はジャンプ作品が苦手で・・・。

造物主（ライフメイカー）（前書き）

少し遅くなりました。
余りアイデアが出てこなくて・・・・。
十二月中少し忙しくなるかもしれないので、更新が遅れる可能性がございます。

造物主（ライフメイカー）

「ん・・・・・？」

ここは・・・どこだ？確か俺はあの黒尽くめのフードやろうにやられて・・・

≪やっと目覚めたか。斉藤霧弥。≫

ん？俺は気絶してた・・・のか？

≪そうだ。もう十時間にもなる。≫

・・・そうだ！あれは・・・あのフード野郎は！？ナギは！？っていうか世界は！？

≪まあ、落ち着け。結果だけを言うと紅き翼の勝利。フード野郎は倒され、世界は救われた。今は世界中お祭り騒ぎだ。まあ、これからまた一騒動起きるだろうがな。≫

騒動？て言うか勝ったんだ。あれ？全然驚きとか無い。まあ、ナギなら普通かなって感じ？

≪儀式は途中までしか成されていなかったが、影響はある。その影響・・・黄昏の姫巫女のマジックキャンセル能力により、天然魔法で浮いているウィスペルタティア王国の島々はほぼ墜落するだろう。

恐らく国が無くなるな。しかもこれを元老院が見逃すはずも無い。恐らくここに適当な理由を吹っかけてアリカ姫を悪人に仕立て上げるだろう。そして自身らの罪をも押し付ける。まあ今は大丈夫だが、数日後の混乱は逃れられまい≫

うっわ。また大変な事に・・・。ナギよ、早く告れ。手遅れになるぞー。

むー。ウィスペルタティア王国の墜落・・・ねえ。

≪まあ、アリカ姫が捕らえられたところで紅き翼が救い出すだろうがな。≫

あー、まあ、そうだよな。ジャックとか喜んでやりそう。

≪まあ、そういうことだ。他の難しい事は他に任せればいいだろう。≫

そうですか。で、気になってたんだけどあんた誰よ？俺あんたしらねえよ。

≪ああ、そうだったな。少し待て。≫

「少し待てって・・・うわぁ！？」

眩しいっ！眩しい！目が！目がぁ！

「貴様、何をやっている？」

ん？声？

痛む目を開けて前を見る。そこに居たのは・・・

「ギャアアアアア！！で、出たあああああ！！」

黒尽くめフード野郎が居た！

「そんなに恐れなくてもいいだろう。さて、まずは自己紹介と行こうか。私の名はアマテル。紅き翼の人間達からは造物主（ライフメイカー）と呼ばれている。解かり易く言えばラスボス。アーウェルンクスたちの親玉だ。つまり完全なる世界のトップ。」

うわ～、この人ラスボスだったよ。どうりで強いわけだ。

「そ、それは解かった。で、でもなんで俺の中に！？」

「うむ。それなのだが、ナギ・スプリングフィールドに敗れた私は、貴様の体を乗っ取ろうとした訳だ。丁度気絶していたんでな。」

「乗っ取るって・・・怖！何しようとしてくれてんだ！」

怖いよ！乗っ取るとかやめてよ！

「だが、そこで問題が一つ起こった。貴様の体に入った瞬間、幾人もの人間に集中砲火を浴びせられ、逆に囚われてしまったのだよ。」

≪俗に言うスーパーフルボッコタイムという奴だ。≫

突然アーチャーの声が聞こえる。

「え？まさかそれってアーチャー達？」

≪そうだ。霧弥の体が乗っ取られるのはこちらもいい気はしないのでね。≫

「そして、貴様の無限とも言える魂の中の一つにされてしまった。まあ、元々生きていて無理やりそうされたのだから簡単に実体化できるが、貴様に逆らう事はできないな。」

ん？実態化出来るのに、何で逆らえないんだ？

「何で逆らえないんだ？」

「貴様がその気になれば私の存在を消し去る事ができるからだ。」

「ブフゥッ！？」

え？消し去れるの？

「消し去れるんだ！？初めて知った！」

「まあ、そういうことだ。とにかく、これからよろしくな。」

「え？う。うん。よろしく・・・。」

差し出された手をとり、握手する。

「それはそうと、フード取らないか？あと、俺のことは霧弥って呼んで欲しい。」

フードあったら怖いし。貴様って呼ばれるの嫌だし。

「そうだな。これから死ぬまで一緒なのだから、顔ぐらい見せないといけないな。」

フードが捲られる。・・・・こ・・これは・・・・！

「ふむ。私が女だったのがそれほどに驚きか？」

黒フードの正体は女性だった。しかも美女でした。しかも美女でした。大事な（ｒｙ

「うわ～～～綺麗だな～～。」

今まで見たどの女性より綺麗な気がする。アリカ姫と勝負できるぞ。

「なっ！？き、きれっ／／／／と、とにかく！私のことはアマテルと呼ぶが良い！」

アマテルか～。なんか日本の神様でそんな名前の奴が居た気がするけど・・気のせいかな？

・・・・ラスボスが仲間になったか・・・・。怖いな。

造物主（ライフメイカー）。世界を消し去ろうと考えた組織のトップ。

うわ・・なんか凄いのが仲間になった？いや、仲間だと決まったわけではないが・・・・。

「あ～。もう駄目だ。眠たい。少し寝る。」

ザ・現実逃避。考えるのが嫌になってきた。

「ならば私はこの部屋で寛いでいるぞ。」

「ああ、そうしておいてくれ。お休み・・・」

決戦の疲れもあってか、すぐに眠る事ができた。・・・寝てる間に殺されたりしないよなぁ？

視点　ナギ

ふぅ～。疲れたぜ。こんなお祭り騒ぎになるとは思っても居なかった。

俺達はあの後、造物主（ライフメイカー）を倒した。

霧弥が姫子ちゃんを掻っ攫っておいてくれたお陰で、儀式も不発となった。

そういえば、霧弥は大丈夫か？正直、あの時霧弥が庇ってくれなかったら負けていたと思う。あの時は本当に死ぬかと思った。・・・

少し様子見に行くか。

さっき見たときはまだ意識は無かったけどな。

「アル。ちょっと霧弥の様子を見てくる。」

「妾も行くのじゃ！」

「おうっ！？」

ヘラスのじゃじゃ馬姫？なんでこんなところに居やがるんだ！？

「霧弥の見舞いに来たくて、侍女から逃げてきたのじゃ！」

えっへんと無い胸を張るじゃじゃ馬姫。もといテオドラ。

て言うか駄目だろ。今頃大騒ぎだろうぜ。

「では、姫の事は任せましたよ。ナギ。」

嬉しそうに言いやがってチクショウ。

「じゃあ、行くかじゃじゃ馬姫。」

「じゃじゃ馬言うな！」

☆

「霧弥は起きて居るのかのぅ・・・」

ずいぶん心配してるんだな。まあ、一番こいつにかまってたのって霧弥だからなあ。

「さあな。そろそろ起きてるんじゃないか？あいつの事だから「ギャアアアアアア！！」は？」

なんだ！？悲鳴？さっきの声は・・・霧弥か！

「オイ！じゃじゃ馬姫はアル達を呼んで来い！」

「わかったのじゃ！」

「クッ・・・霧弥！」

霧弥の部屋へ向かって走る。あんな叫びは尋常じゃない。

（まさかメガロのジジイ共か・・・？）

考えつつ、霧弥の部屋の前に到着する。そして扉を蹴破ろう・・・として止めた。

中から声が聞こえて来たからだ。明らかに争っているわけではなく、話し合っている感じの声だ。そっと、扉に耳をつける。そして聞き

耳を立てて中の様子を疑う。

「何・・逆ら・・だ？」

霧弥が何かを聞いている感じの声。

「貴様・・・なれ・・・存在・・だ」

「ブフゥッ！！」

（な、なんだ！？何があったんだ！？）

いきなり霧弥が何かを噴出すような声。殴られたようには聞こえなかったが・・・。

「うわ・・・綺麗・・・」

「なっ・・・とにかく・・・アマ・・良い」

なんと言っているのかが少ししか分からない。

ただ分かるのは、戦おうって言う気がないという事だけだ。

「・・・・・眠たい。少し寝る」

オイ！寝ていいのか！？

・・・少しして寝息が微かに聞こえてくる。本当に寝たのかよ・・・。

そろそろ中に入るか。

「おい霧弥。入るぞー。」

寝ているのは分かっているが、一応の挨拶はしておく。

「中に居るのは誰なん・・・な！？」

今日二度目の驚愕に俺は包まれた。

視点　アマテル

霧弥が寝てすぐ、ナギ・スプリングフィールドが部屋に入ってきた。私の事を見て驚いているが・・・まあ、当然だろうな。

「な・・てめぇ！何でここに居やがるんだ！」

ナギ・スプリングフィールドが声を荒げる。うるさいな、霧弥が起きてしまうではないか。

「静かにしろ。霧弥が起きてしまうではないか。」

「え・・あ、ああ。すまなかった・・・じゃない！だからなんでお

前がここに居るんだよ！」

まったく。五月蝿い奴だな。しょうがない。霧弥のベッドの周りに結界を張っておこう。

「何でと言われてもな・・・まあ、霧弥の能力のせいだと思ってくれ。」

「は？霧弥の！？・・・どう言うことだかわかんねえ！」

こいつ・・・バカだな。いや、１（プリームム）からバカだとは聞いていたが・・・。

「つまり、あなたは霧弥の能力によって生み出された造物主（ライフメイカー）の魂のコピーであると？霧弥は、出会った人物の魂を複製する事ができたはずです。」

ナギ・スプリングフィールドの横からアルビレオ・イマが出てきた。その証言は合っている様に聞こえても、合っていない。

「それは違うぞ。アルビレオ・イマ。現に私は現界しているではないか。霧弥の能力では、魂は霧弥の体を操ることはできても、現界する事はできまい。」

「・・・確かに、そのような事は見たことがありませんね。つまり・・・」

「そうだ。私は本物の造物主（ライフメイカー）。斉藤霧弥を攻撃したのも、ナギ・スプリングフィールドにやられたのもこの私だ。」

「「「「「「！！！」」」」」」

ナギ・スプリングフィールドとアルビレオ・イマ。それにいつの間にか来ていたジャック・ラカンに青山詠春、更にガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグとフィリウス・ゼクトが構える。どうしたものか。私はもう戦う気はないのだがな。正直面倒くさいし。

魔法世界のリライトもする気は無い。その前に出来ない。霧弥に何時消されても可笑しくない状況なのだから、出来るわけが無い。

「私は、貴様らと戦り合う気はないのだがな。ナギ・スプリングフィールド。」

「そんなもん信じられねぇっつの！」

「そうですね。霧弥にも何かしてるようですし。結界ですか？」

先程張った防音結界を指差してアルビレオが言う。

ふむ、私が霧弥に何かをしたと思っているのだろうか？

「あれは唯の防音結界だ。貴様らが余りにも五月蝿いので、霧弥が起きないように張った。」

「そんな事を信じるわけにはいかないな。」

今度はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

ぐ・・・さっきから鬱陶しいな。私は違うといっているのに。

・・・・ここは、逃げるか？面倒くさいし、また殴られるのなんてごめんだ。

霧弥の中に戻ってゆっくりと寛ぐとしよう。

「信じないのなら信じなくてもいい。ただ、私はもう争う気は無いと言う事を伝えておく。」

霧弥の寝ている場所へと歩く。

「待ちやがれッ！！どこに行くつもりだ！」

ああ～！今度はジャック・ラカンか！紅き翼は五月蝿くする事しかできんのか！？

「こ・こ・だ！」

少し怒りを込めながら、霧弥を指差す。

ふう、これで少しは静かに・・・

「霧弥に何をするッ！」

うあああああ！今度は貴様か！青山詠春！もうキレても良いよな？私。

「な・に・も・し・な・い！！」

強く怒りを込めて言う。ふう、さっさと戻ろう。

改めて霧弥へ向かって歩き出す。これでゆっくり・・・・

「させるか！雷の暴風！！」

だ・か・ら！貴様らいいかげんにせんか！

くそ。雷の暴風か・・・。痛いのは嫌だし・・・無視して戻るか。

少し視界がぼやける。視界が元に戻ったとき、場所は既に私の部屋だった。

霧弥の中に部屋があるのには驚いたが、寛げるという意味では嬉しい。

では、早速ゲームを・・・

『ぎゃあああああああ！？』

出来ない！今度は霧弥の絶叫か！いったい何があったというのだ！？

『痛い！なんじゃこりゃあ！？』

『スマン霧弥！お前を狙ったわけじゃ・・・』

『やかましいわ！死ねえ！』

『ゴフゥッ！』

あー。私が避けた雷の暴風が霧弥に当たったか。

そして霧弥がナギ・スプリングフィールドを殴ったかな。

まあ、外がどうだろうと関係無い。

私はこれからファイアー・エ〇ブレムをするのだ。ユアン可愛い。

視点　霧弥

俺は激痛により目が覚めた。

それはナギが放った雷の暴風が原因だった。

もちろん俺はナギを殴った。気持ちいいぐらいに決まった。

「で、何で俺に雷の暴風を放った？」

俺は正座しているナギに問う。右手には棘付きグローブ（どこから出したかは秘密）

「いや、だから俺はお前を狙ったわけじゃないんだって！」

この期に及んでまだ嘘を言うか。あの場、あの射線上に俺以外の誰

がいたというのだ。

ああ、イライラして来た。今の俺なら筋肉マンゼブラの闇モード並みの残虐ファイトが出来ると思う。もちろん一方的に。

「霧弥。ナギの行っている事は本当ですよ。」

「え？マジか？じゃあなんで俺に雷の暴風が？」

そこが気になる。

「霧弥の部屋に来たら、そこに造物主（ライフメイカー）が居たんだ。そいつに放った攻撃なのだが、急にそいつが消えてな。射線上のお前に当たったというわけだ。」

ガトウが説明してくれる。

造物主（ライフメイカー）って言うと・・・アマテルか！

「造物主（ライフメイカー）は争う気は無いと言っていましたが、信じられません。」

いや、信じてもらわないといけないな。

「あー、アル。あいつは大丈夫だ。いろいろ事情があってな。あいつはもう敵じゃない。」

「どう言うことですか？」

「それは――――」

（説明中。少々お待ちを）

「やはり貴方はバグでしたね。造物主（ライフメイカー）を取り込むとは・・・。」

バグって言わんといてー。分かってくれたようでよかったけど。

そういえばアマテルは何してるんだ？

（おい、アマテル！）

≪・・・・・≫

（アマテル！！）

≪・・・・・・・・・≫

（ア・マ・テ・ル！！！）

≪ハッ！？ユアンが可愛すぎてボケッとしていた！何だ霧弥？≫

（いや、お前が何してるのかと思ってな。ファイアー・エ〇ブレムか。懐かしいな。）

確かにユアンは可愛い。小動物みたいで。でも俺はアメリア派だ。

「まあ、そういうことで納得してくれたら助かる。」

ナギ達に言う。

「・・・分かったけどよ、本当に害はねぇんだな！？」

「ああ、無いよ。今もゲームしてるし。」

疑い深いなあ。いつものナギならどうでもいいやって感じだろうに。

ジャックも真面目に聞いてやがるし。

ウィスペルタティアが滅ぶとか何とか言っていたけどこっちはこっちでヤバイな。

だって造物主（ライフメイカー）がいるんだぜ？怖くて夜も寝られねえよ。

俺は寝れるけどな。でも、これがメガロの元老院のお偉いさんに知られたらどうなるんだろ？

指名手配確実？うわ、もう指名手配とか嫌だぜ。

まあ、なんにせよトップシークレットである事には変わりないな。

世界を廻らなきゃならないのに、一個目の世界で死んじまうとか嫌だから。↑切実

造物主（ライフメイカー）（後書き）

前話で開催したアンケートですが、少し追記を。
次の霧弥が行く世界を決めてくれというものでしたが、どのような世界かは問いません（ジャンプ以外では。）。
例えばｆａｔｅや伝勇伝などのファンタジーやバトルも良いですし、バカテス等の学園物でもいいですし、ＷＯＲＫＩＮＧなどの少し変わったものでも構いませんし、ハヤテのごとく！やまよチキなどでも構いません。
ただし、出来ないものもあるという事もお忘れなく。

アリカ姫救出（前書き）

前話からかなり飛びます。
この間を書くのが難しくて断念してしまい・・・・。
アンケートに数名のユーザー様がご協力してくれました！ありがとうございます！
まだアンケートは受け付けていますのでご協力お願いいたします！

アリカ姫救出

終戦から少し経った日。

アマテルの言ったとおりウィスペルタティア王国は壊滅した。

ただ、アマテルの言葉を紅き翼メンバーに俺が伝えておいた事により、犠牲者は人口の一パーセントを下回った。しかし、ウィスペルタティア国民は難民となり、住む場所を失っていた。

他国に頼れる人がいるものはその人物の元へ。

ある者は森の中で暮らし。

そして殆どの難民は皆奴隷となって命をつないだ。

そしてアリカ王女は、奴隷法を通した事。そして先王殺し及び完全なる世界との内通の濡れ衣を被され
投獄。

俺達紅き翼も無実を証明するために色々と動いてみたが、全て失敗。

アリカ王女は災厄の魔女とされ、二年後の処刑が決まった。

そこからはナギが言い出した戦争孤児の保護。及び未だ絶えない紛

争地域へ赴いて終戦及び子供達の保護。そして治療。その間のナギは何時でも思案顔をして悩み続けていた。

そしてその活動をしながらもアリカ王女の処刑は近づいてくる。

そんなこんなで、もう二年が経とうとしていた。

・・・と言うのが現在の状況である。

「っと危ないなあ。もうすぐ燃え死んでたぞ。」

燃えてる建物の近くに倒れていた子供を抱える。大丈夫。息はある。

「アル、治療を頼む。」

「分かりました・・・・これで大丈夫だと思いますが。」

子供の苦しそうな顔が安らかな寝顔に変わる。うんうん。子供はこうじゃないと。

「よし。大丈夫そうだ。じゃあ、俺はこの子を孤児院へ送ってくる。」

子供を抱え、駆け出す。駆け出すといっても、最近陸上選手なんて相手じゃないくらいに足が速くなった。瞬動は使えないけど。

向かうのは中立国アリアドネー。あそこなら他国の影響を受けにくいし、学ぶ意欲のあるものは例え犯罪者であろうと受け入れる・・・と言ってるぐらいであって、孤児達を快く受け入れてくれる。更に孤児達を学校にまで通わせてくれると言うのだから、最高だ。俺達がこの活動を始めたときに、孤児院を作ってくれた王には感謝しないといけない。

・・・ん？あれは？

「おーい。ちょっと待ってくれー。」

「ん？だれだ・・・ってキリヤ殿！？こ、これは失礼しました！」

前を歩いているのはアリアドネーの騎士団。ああ、そういえばさっきの戦争に介入してたな。戦争を収めるのに協力してくれて助かった。

「ああ、そんな堅苦しくしなくていいよ。それで少しお願いがあるんだけど・・・この子をアリアドネーの孤児院まで連れて行ってくれないか？さっきの戦争で出た孤児でね。」

「孤児・・・ですか？分かりました。確りと送り届けます。」

「ありがとう。じゃあ、頼んだよ。」

いやあ、頼りになるなあ。

「ハッ。そ、それでキリヤ殿・・・」

「ん？」

「ササ、サインを頂けないでしょうか？」

サイン？ああ、確かナギも貰っていたな。

「別にいいけど・・・俺なんかのでいいの？ナギのやつを貰って来て上げても良いけど？」

「い、いえ！私はキリヤ殿のサインが・・・」

ん～？俺のサインなんかにそんなに価値があるんだろうか？まあ、子供を孤児院にまで送ってくれるんだから書くけど。

手渡された色紙にサインを書く。えっと、名前に・・・なに書けばいいんだろうか？

まあ、名前と紅き翼とだけ書いておけばいいと思う。

しかし・・アリアドネーの騎士は皆サイン色紙を持ち歩いているのだろうか？

たしかナギもサインをねだられてたと思うし。アリアドネーの騎士に。

「はい。これでいいか？」

書き終えたサインを手渡す。

「ハ、ハイッ！ありがとうございます！」

「じゃあ、そろそろ行くから。」

そういってもう一度先程の村へ戻る。少し時間食ったな。

本気で走って戻る。すこし走ると、村が見えてきた。ん？皆集まっているな。

「おーい。皆どうしたんだ？終わったのか？」

「あ、霧弥さん！大変です！」

タカミチが走り寄ってくる。何が大変なんだ？詠春でも死んだか？ハッハッハ。

「アリカ姫が十日後に処刑されることが決まったんです！」

処刑？・・・って処刑！？

「マジか？」

「本当です！十日後にケルベラス渓谷で処刑が！」

「ケルベラスぅ！？」

まて、ケルベラスって言ったらあのケルベラスだろ！？魔獣がうじゃうじゃいて魔法が使えないって言う。吸血鬼の真祖（ハイ・デイライトウォーカー）でも復活不可能って噂の・・・。

「ナギ！」

「ん？なんだよ霧弥・・・」

元気無いな。もっとやる気出せよ。どうせ助けるんだろ？

「そんな辛気臭い顔（ツラ）してないで、元気出せよ。助けるんだろ？」

「・・・そうだけどよ・・・」

「大丈夫だって。俺達が付いてる。絶対に成功するさ。」

「・・そう、そうだよな。ありがとよ霧弥！ぜってぇ成功させてやるぜ！」

元気になったか・・・。このほうが気持ちがいい。

「ナギ」

「ん？」

「上手く助けたら、一気に告白しちまえ。いっそプロポーズしろ。」

「んなっ！？」

いやいや、これ以上内絶好の機会だぜ。処刑される王女を助ける英雄・・・ってな。

「うへへへ・・・なんだぁ？ナギ、おめぇ告白すんのかぁ？ほれほれ。」

ジャックがナギの頬を突く。

「バッ、なに言ってんだ！殴るぞジャック！」

「うひひひ、どうしたぁ？ほれ、おっさんに話してみろや。へっへっへ。」

「うるせー！」

「もぺんっ」

あ、良いのが決まったな。ジャックの顔面にナギの拳が叩き込まれた。

あいつら仲いーなー。いつも殴り合ってるし。

十日後に処刑か・・・まあ、ケルベラスとか怖くないけどさ。

え？その理由？まあ、それはご想像にお任せします。

さーってと。家に戻ってシャワー浴びて寝よっと。疲れた。

余談だが、一年半経ったが、俺の身長はまったく変わらない。体重も変わらないし、身長も変わらない。見た目も変わらないし、髪も伸びない。

なんか成長が止まっている。やばい、タカミチに追い越されてしまう。

神様が何かしたんだろうか？う～む。
傷が再生しないから真祖の吸血鬼にされたというわけでも無い。
不老にしたという話しも聞かないし、ゼクトと融合したわけでも無い。
本体が骨董品だとか本だとかという事も無い。幽霊でも無い。
ロボットでもなければ人造人間でもなければ光の戦士でも無い。
某超野菜人でもないし、エイリアンでもない。古龍でも無い。
う～ん。謎だ。神様に聞いてもいいと思うけど連絡の取り方知らないし・・・。
・・・年齢詐称薬注文するか？いや、でもそれは・・・。
いや、まずはアリカ姫の救出の事を・・・いや、でも身長が伸びないのは・・・。
ああ～成長したいよ成長したいよ～。

～十日後～

皆さんやりました！身長が一センチ伸びました！
ええ、伸びましたとも！決して靴の裏に細工なんてしていませんよ！していませんよ！
まあ、そのような事はさて置き、現在アリカ王女の処刑実行中。

ケルベラス渓谷に落ちていくアリカ王女を助けるのはナギの役目だ。
ケルベラス渓谷の魔獣など造物主（ライフメイカー）たるアマテルには無力に等しいのでアマテルに手伝って貰うかと言ったのだが、

「これは俺一人でやる」

だそうだ。ふふふ、応援してるよ。ナギ。

で、皆ケルベラス渓谷を囲むメガロメセンブリアの兵士の中に紛れ込んでいる。

この兵士達はメガロの精鋭部隊（笑）だそうだ。

俺達の侵入に誰も気づいていない。その部隊が精鋭部隊だそうな。無能だ。

それにしてもジャックなんて敵のど真ん中。老院議員の傍にメガロの鎧を着て立っている。大丈夫なのか元老院。

ちなみに、俺の居る場所だが、アリカ王女が歩いている真下。渓谷の上に有る細い石の道の下。現在頭上にアリカ王女。・・・ん？そろそろか。

トンっという音と共にアリカ王女が落下する。さて、後はナギの仕事だ。

・・・・・アリカ王女が飛び降りたときにパンツが見えた事はナギには秘密だ。眼福なり。

よし、行けジャック！

「よおーっし。こんなもんだろ。撮れたか？ちゃんと撮れたか？そうか、よくやった。ご苦労。オイおっさん。これ生中継とかじゃねえよな？それだと不味いんだけど。」

頭上からジャックの声が聞こえる。

「無礼者！何者だ。貴様名を「おっさん」ぬぐう！？」

おお、老院議員がカンカンだ。けどジャックに抑えられたな。

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こる事は無かった事になる。」

「きっ貴様は・・・」

「ぬんっ！」

バキィッ

ん？何の音だ？今の。・・ん？鎧のパーツ？・・ああ、ジャックがキャストオフしたんだな。

「せ、千の刃の・・ジジャジャックラカン！？」

どよっ

周囲の兵士がどよめく。

「青山・・・詠春っ！」

ざわっ

「アルビレオ・イマ！ガ・・ガトウ！」

さて、そろそろ俺も出るか。

「ん～・・よっこいしょっ！」

「さ、斉藤・・霧弥だと！？紅き翼！で、では谷底の王女は・・・・・バカなっ！いかに千の呪文の男といえど、あの谷底から生きては・・・」

「帰れると思うけど？」

「なっ！？」

だって・・・

「ありゃ、バグだから。」

これだけで説明できるって便利だよね。

「ぐっ・・・捕らえよ！反逆者だ！谷底の二人も逃がすな！」

「おおっと、やるのか？その程度の戦力で？」

「ふん、このイベントの警備はここに見えるだけでは無い。周囲数十キロ二個艦隊と三千名もの精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでも・・・「だから」ぬ？」

「だから、その程度の戦力でいいのかって聞いてるんだよ！」

「なっ・・・なに！？」

ドガアアアアン！

・・・この音から、一方的な虐めが始まった。殺しはしない。八割殺しだ。

（モード、高町なのは。）

某リリカルな主人公。知ってるかい？この子達の使う魔法には非殺傷設定って言う超便利な機能があるんだよ。斬っても叩いても死なないって凄いよね。

さーーってなのは君。全力全開なあれ逝っちゃって下さい。

「りょうかい！全力全開・・・スターライト――――――」

せーの！

「ブレイカーーーー！」

千の雷とか艦隊の精霊砲とかラカンインパクトとか目じゃない位の光の奔流。

それが若干一名筋肉達磨を巻き込みながら敵のど真ん中に着弾する。

すげーぜ。

サンキューなのは君。

「どういたしまして！頑張ってね霧弥君！・・・・・・・・・・・・・・・うおお、やる気が出てきた。」

なぜだろうか。女の子に応援されているって言うだけで力が沸いて来る。

よし！お兄さん頑張っちゃうぞーーー！

「霧弥」

「ん？なんだ詠春？俺は今から艦隊にケンカ売りに行くんだ。負けると思うけど。」

「負けるなら行くな。それで、ナギの事なのだが・・・」

「やっぱり心配？」

お互いに戦いながらの会話。俺は兵士を殴り飛ばし、詠春は峰打ち。

「やはり、魔法も気も使えない状態であの渓谷には・・・」

「まあ、大丈夫じゃないか？信じてやればいいじゃんか。」

また兵士を殴り飛ばしながら言う。

やっぱり、信じてあげるべきだと思うんだ。一人で行くと言ったのもあいつだし。

「ほら、もうあそこに見えるじゃんか。」

「む？本当だ・・・ってな！？」

「どうしたえいしゅ・・・うおおっ！？」

詠春が驚きの声を上げる。俺は詠春の見ている方を見る。

その先では・・・

ナギとアリカ姫が口付け・・・キスをしていた。

「うほっ。やるじゃねえかナギの奴。」

ジャックが言う。うんうん。よくやったよナギ。

「よっしゃ！じゃあ、ドカンと一発祝砲代わりに暴れようぜ！」

ジャックの言葉を皮切りに、九割殺しが始まった。紅き翼の中で数少ない常識人であるガトウも、これを止める事はせず、盛大に暴れていた。

アリカ姫救出（後書き）

・・・この話し書いてて、ナギにはじめて殺意が沸きました。
アリカ姫とキスとか羨ましいにも程があるっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0780w/

無限の魂を持つ転生者

2011年12月9日02時55分発行